

セカイの呪いを解くために。

はたけのなすび

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そこはかつて少女が呪い、祈りを捧げたセカイ。  
約束された崩壊が待つ世界で生きる、人とドラゴンの物語。

・『セカイに強度が足りてない。』の続編となります。前作はこちら  
から↓(<https://syosetu.org/novel/212259/>)

その十	その九	その八	その七	その六	その五	その四	その三	その二	その一
96	87	79	68	57	45	34	24	13	1

目次

## その一

彼と彼の龍が隠れ里を訪れたとき、大人たちの慌てぶりと云ったらひどいものだった。

ひっそりと、川の岩陰に住む魚のように息を殺し、隠れて、時が流れていくのをやり過ごして生きてきた隠れ里の人間たちにとって、境界をもとめせず、山を飛び越えて、自分たちの前に現れた漆黒のドラゴンは、まさに冥府の使者に映ったのだ。

里中が上を下への大騒ぎに叩き込まれていながら、自分はただ、里の隅で茫洋と佇んでいた。

あるとき、自分の隣には誰がいただろう。

思い出せなくなってしまうけれど、誰かがいてくれた気はするのだ。

だって、そうでなければ、臆病な自分はあれほど落ち着いていられなかっただろうから。

自分は誰かと一緒に、多分手を繋いだまま、里の恐慌を眺めていた。逃げるつたつて、どこへ行くというのだ。

空を自在に飛び、炎を吹くドラゴンと、それを御する龍使いからどうやって逃げるというのだ。

ドラゴンの力は言わずもがなで、ドラゴン乗りたちは魔力で水面を走り、信じがたい速度で剣を操り、魔族を斬り殺すことのできる、人の枠から外れた戦士だ。

いくらこの里に優れた剣士がいたとしても、刀が届かない距離から攻撃してくる相手にどう立ち向かうというのだ。

大陸全土を覆う魔力結界すら張ることができる化物に目をつけられたら、逃げるも逃げないもない。

こんな貧しい隠れ里など、炎の一吹き二吹きで消え去るだろう。

そんな簡単なこともわからない大人たちは、溪谷にへばりつくよう

にして細々と拓かれた里の上空を飛ぶ龍の影の下で、右往左往していた。

いつか終わると思っていた生活が壊れるときなど呆気ないと思いつつ、空を見上げる。

いつか行つてみたいと焦がれるほど望んでいた空を駆ける龍と、その背に乗る戦士。

二つのいのちを一つとして、自由に空を行く彼らが、ただひたすらに羨ましかった。

自分には決して届かない高みにいる彼らが、妬ましかった。

無慈悲に、空から自分たちを睥睨する龍を睨んだときだ。

黒龍の背から、人が一人、飛び降りて来たのだ。

無造作に鞍の上に立ったかと思うや、そいつは躊躇いなく足を下にし、飛び降りた。

猫のように軽やかに降り立ったその姿を、自分は今も、忘れていない。

川底の泥色のような黒の髪は紐で束ねられ、その両眼は濃い紫色。髭の影すら見えない白磁の肌をし、歳は二十歳の前半か、半ば程度。

だけど、どれだけ若く見えても、その眼にある光はもっと深い、様々なものを見てきた色をしていた。

里の老人たちと少し似ていて、でももっと深みに佇んでいるような、そんな眼だった。

紫眼の青年は、口を開く。

黒を基調にし、銀色の籠手や脛当てがついた衣はドラゴン乗りの軍装で、腰には飾り気ない革の鞘に収まった長剣が佩かれていた。

「この里の長と、話がしたい」

青年が口を開いて告げたその言葉は、まるで何かの託宣のように人々をその場に留める力があつたことを、今も覚えている。

——それがただの幻想であつたという事実と合わせて、鮮明にだ。

#####

俺の師匠に曰く。

人がドラゴンを選ぶのではない。ドラゴンが、人間を選ぶのだそう  
だ。

そんなことは言うが、師匠は昔、剣を突きつけて契約しろとドラゴ  
ンに迫ったという。

師匠の古い知り合いが、くすくす笑いながら教えてくれたことであ  
る。

若いころの話をばらされた師匠は、自分の失敗のうちの一つだから  
こそ、お前にやってほしくないのだと、元々表情に乏しい顔に精一杯  
の苦味を浮かべ、つけつけと言っていた。

ドラゴン乗りは、なりたいたいと思つてなれるものではない。  
そして、一度印が刻まれたならば、降りることは許されない。

選ぶのではなく、選ばれてこそなれるものなのだ、師匠は真面目  
に言うのだ。

ドラゴンと二度目の契約を交わした折、深い紫に染まったという、  
二つの眼で真っ直ぐにこちらを見つめながら。

真剣な話をするときの師匠の瞳は、人間のそれではなく、宝石を嵌  
め込んだかのように硬質に光っていて、だからこそ、その瞳がとても  
苦手だった。

自分に注がれるには、あまりに視線が真っ直ぐすぎて、そこにある  
光が一途過ぎて。

翻つて今の状況は、まさにその眼差しから逃げた結果、であるのだ  
ろう。

「なあ、さっきの見てたぞー！すごいなあー！すごく強いだろー！」

ドラゴン乗りたちの本拠地、円状都市アジャーテイの闘技場。そこ  
に自分はいた。

目の前にいるのは、黒い髪に明るい金色の瞳を輝かせる同じ年頃の少年。

こちらもこの歳にしては背が高いほうなのだが、さつきからしきりと話しかけてくるこいつのほうが、やや背が高い。

割と、ムカつく。

押し黙ったまま壁にもたれ、腕組みを崩さないこちらをどう思ったのか、少年は何かに気づいたように眼を瞬いた。

「あつ、名乗りもせずにいきなりすまないな。俺はルグナ！そちらの名前は？教えてくれないか？」

「……」

離れようにも、ここは闘技場の舞台裏、控えの部屋でどこかに行きようもない。

他の参加者が見ている中で騒ぎを起こすのも良い話ではないと判断し、口を開くことにした。

「……ハヤ、だ。姓はない」

「ありがとう。良い名前だな、ハヤ！」

何故、こうもあけつびろげに笑うのだろうと思いつながら、自分はまだ黙っていた。

少しどころか、普通に後ろ暗いものを抱えてここに来ている上、元々他人に明るく話しかけられるのに慣れていない。

見ず知らずの人間の眼を真っ直ぐに覗き込めるような人間は、こちらにとっては未知も良いところだった。

日頃から身近にいる人間は師匠くらいであるが、師匠は世辞にもここやかな人間ではない。

世の無愛想と無表情を煮込んで、抽出したような人なのだ。

岩よりいくらかマシな話し相手とすら、言われていたことがある。岩と比べられる人間でそれはどうなんだ。

「ところでハヤ、俺はそちらに聞きたいことがあるんだが」

「後にしてくれないか」

今この日、この闘技場では一年に二度の【闘技祭】が行われているのだ。

文字通り、大陸中から腕に覚えのある者が集い、開かれるこの大会で、自分は本戦に残っていた。

ルグナも同じように残っている人間なのだろう。立ち居振る舞いが堂に入っていた。

それも当然だ。

次は準決勝だから、ここまで残っている人間に弱い者はいないはずなのだ。

そもそもこのルグナが、次の対戦相手ではないだろうか。

次に戦う相手と、あれこれ話すなどしち面倒で敵わない。変に顔など覚えたら、相手がしにくい。

そう思っている間に、案の定自分と、目の前のルグナの名前が無機質な声で呼ばれる。

傍らに立てかけていた鞘に入ったままの剣を取り、闘技場の入り口へと歩き出す。

「あつ、ちよつと待ってくれよ！大事な話なんだ！」

だというのに、ルグナは慌てたようにこちらの隣に並び、やはり屈託なく話しかけて来た。

それも無視して進もうとした途端に、ぴり、と肌が痛みに似た微かな気配を感じた。

「……なんだ」

いきなり気配に込められた、針のような鋭さに立ち止まれば、朗らかな笑顔を引っ込め、ルグナは眼を細める。

金色の瞳が、刃物のように細くなっていた。

彼の指が指したのは、この手が持つ剣だ。

飾り気ない黒い革の鞘に収められ、茶色い革が柄に巻かれた一振りの両手剣。

「アンタが持っているその剣、それはどこで手に入れたんだ？」

朗らかだった雰囲気剥がれ落ちるよう変わる。左の腰に吊るしたルグナの剣の、柄頭に嵌め込まれた金色の石が光った。

どうして知っているのだろう、とは考えなかった。

ルグナの服の釦に刻まれている、蔓草が氷花に絡み付いた紋章に



は、とつくに気がついていたらだ。

ルグナの顔に見覚えはない。完全な初対面だ。だが、その家紋に見覚えはあった。それをぶら下げた家の人間であるならば、確かにばれでもおかしくはない。

なんでこんな家の人間がここに来るんだと、愚痴混じりな想いはあるが、人生そんなもんだらう。

早々に、諦めた。

「……後で話すつつつてんだろ。あんたに負けたら、全部話すさ」

「本当か？」

「あんだだけ観客がいるんだぞ。逃げるも逃げないもないだろ。言つとくけど、俺は別に盗んだわけじゃねえよ」

「い、潔いな！まあ、もし逃げていたなら、追いかけてぶつとばしてたけどな」

「お前、顔に似合わず物騒だな。お坊ちゃん」

「お坊ちゃんじゃない！俺はルグナだ」

細められていた眼が元に戻る。ルグナはにやりと笑った。

その微笑みになんとなく怖いものを感じて、ルグナから半歩横に離れる。

そう、自分は盗んではないのだ。盗んでは。

勝手に、無断で、師匠が持つ赤い剣を借りただけであつて、盗んだつもりはないのである。

——結構な詭弁であることは、百も承知だった。

凡そ五十年前、この世界は呪われたという。

血のように赤い瞳と髪を持つ黒龍の乗り手によって、世界は呪われ

ると同時に、護られたと人々は語るのだ。

北大陸から押し寄せ、人を喰らったという魔族から、南の大陸全土と海の一部を護る【百年結界】。

それをたった一人で張り、大陸を護ったのが、件の【赤】の乗り手だった。

名は、アジイザ。

ドラゴン乗りたちの本拠地、円状都市アジャーティの名の由来にもなった、五十年前の人間である。

当時のドラゴン乗りたちの中で唯一の女の乗り手だった彼女は、今も尚様々に呼ばれている。

その中で、最も知られている異名は【赤】の魔女と【赤】の巫女だ。彼女を畏れ嫌う者は魔女、敬い慕う者は巫女と呼ぶのだから、わかりやすいと言えばこれほどわかりやすい名はないだろう。

後者の呼び方をしている人間が圧倒的に多いが、魔女呼ばわりする人間も皆無ではないのだ。

人々を護るため、その身すべてを引き換えにして結界を張った彼女を何故恐れる者がいるのかと言えば、やはり彼女自身に起因する。

結界を張った際、彼女は南の大陸すべての人間、すべてのドラゴンの脳裏に、ある化物の姿を直接叩き込んだのだ。

燃え盛る炎のような、怒りの言葉と共に。

この結界は、百年しかもたない。

この時代を生きているお前たちの生は、魔族によって脅かされることはないだろう。

だが、お前たちの子々孫々は違う。

その化物、【混沌】を滅ぼさなければ、南大陸すべての生命は喰らいつくされるだろう。

それが認められないならば、戦え、と。

当時を克明に覚えている者のほとんどは、既に六十を越した老人である。

が、その言葉に込められていた触れれば切れるような苛烈さと、悍ましく蠢いていた【混沌】の姿は、今でも決して忘れることができない

いという。

戦え、止まるな、油断をするな、という叫びを直接頭に叩き込まれ、それでも未来を見据えられた者は、アジイザを讃えた。

が、受け入れられなかった者は、あれだけの怒りを燃やしたドラゴン乗りが世界を呪ったと彼女を恐れたのだ。

人知を超えた化物など、お前たちドラゴン乗りが倒すべきだろう。何故我々にまで戦えというのか、無意味に死ねというのか、と。

そんな彼らは、黒の龍乗りを指して魔女と呼ぶ。

馬鹿な話だと、心底思う。

呪うも呪わないもない。何百年も前から、あの【混沌】は世界に巣くっていた。

黒のドラゴン乗りは、ただ真実を明らかにしただけ。

それに耐えられなかった者が逆恨みして勝手につけた名だけが、独り歩きしているのだ。

足掻こうが目を逸らそうが、平穏な世界の寿命はあと長くて五十年。

その先に訪れる『好機』を上手く活用できなければ、この世界は滅びる。

それだけが、真実だ。

そんな話を、唐突に思い出した。

今この場で、金色の瞳を光らせる少年を相手にして。

瞳の奥に、昔のことを語るときに師匠と、同じものを見たからだ。

同時に、こんな場面で思い出すことではなかったと、少し後悔する。

これは余分だ。邪念だ。今の自分には、いらぬ感情だ。

何故ならここは、闘技祭の会場。五十年前の戦いを讃えるためにと作られた『祭り』。

闘技と名がついてこそいても、魔力を用いてる戦士すら現れない祭りは、師匠が言わせれば単なる演劇の舞台にも等しい。

飾った舞台の上で行う人々を安心させるための見世物であって、本当にいのちを懸けて腕を試すためのものではない。まったくの無意味な祭りだとは言わないが、それでも俺は行く必要を感じない、むしろ

ろ行きたくない、というのが師匠の意見だった。多分、最後の一言が本音だろう。

だが、自分はこの場に立っている。

闘技祭を勝ち抜いた者に与えられる一つの権利。それが欲しくて、この街を訪れたのだ。

南大陸から老若男女問わず集った腕に覚えがある者と言っても、闘技祭の参加者は師匠よりも遥かに——弱い。

師匠に連日しごかれていた身にとっては、多少苦戦するときもあれど、勝てないと思う相手はここまでいかなかった。

それはきつと、ルグナも同じだろう。纏う雰囲気には、何某か余裕のようなものがあつた。

観客が飛ばす野次も、ぐだぐだと続く解説役の煽るような謳い文句も何もかも、すべて受け流している。

自分と、同じだった。

もしかすれば、このルグナも何か腕を競う以外の目的があつて、闘技祭に参加したのかもしれない。

審判役の男の口上を信じるならば、ルグナは十七歳。同じ歳だ。

大陸中央部から来て、ここまで苦戦はなく進んで来た希代の新星……だそうだ。

審判共がこいつの服についた釦の紋章に気づいてないことはないだろうに一切触れないということは、見なかったことにされたらしい。

面倒ごとだからと言って後回しにしないで欲しかった。

「〔抜かず〕のハヤつて……なんだよ、クソ」

勝手に解説役の男がつけた名を聞いて、鼻を鳴らした。

抜かずは文字通りの名前だ。ここに至るまで一度も、自分は鞘から剣を抜いていない。

抜いていないままの剣一本で、ぶん殴るかぶつ飛ばすかでここまで勝ってきたのだ。

端からどう見えているのかは知らないが、断じて相手を舐めてかかってそうしているのではない。

認めるのは、非常に、非常に不本意であるが、抜きたくとも抜けないのだ。

抜けない剣など、ただの鈍器である。

ならば棍棒を使えよと言われそうだが、自分はここまで剣を手放さず、しかも勝って来た。

一方のルグナは、長剣一本。造りはこちらの持つ剣と同じである。砂が敷かれた闘技場の中央で向き合い、鞘から剣を抜いたルグナは切っ先をこちらに向け、断固とした口調で言った。

「さつきも言ったが……俺が勝てば、何故アンタがその剣を持っているのか話してもらおうからな」

「勝てば、な」

客観的に見て、ルグナと自分の強さは、同じほどに思えた。

素の強さが同じならば、抜けない剣を無様に振り回している自分よりも、銀色の剣を自在に操るルグナのほうに分があるだろう。

しかし、こちらにはこの剣を手放すことができない。できない理由があつたのだ。

手にしつくりと馴染まない黒い革の柄を、強く握りしめた。

自分では赤い剣を操り、閃くような速さで敵を斬る師匠のように戦えない。

剣すら抜けないのだから、笑い話だ。笑い話以下の、とんだ駄作だ。だが、どうしても譲れないものがあつた。

ルグナに、負けるわけにはいかない。負けたくない。

一段高いところに座っている審判役が、真っ直ぐに片手を上げる。

「では——試合、開始！」

砂を蹴って、先に跳び込んで来たのはルグナのほうだった。

腰だめに構えた剣を横薙ぎにして、左腕を狙って来る。

刃引きしてないんだぞと内心罵りながら、鞘ごとその一撃を受けた。

峰で受け流し、体を回転させてルグナの脇腹を狙う。だが剣を一瞬で引き戻したルグナは、その攻撃をぎりぎり凌ぐ。

当たっておけよ、と舌打ちが漏れた。

互いに距離を取り、それぞれの得物を構え直した。

「お前なあ！この場面で人死に出す気かよ！真剣だろ馬鹿！」

「まさか！アンタならば受けられると思っていたぞ！そっちだって真剣だろう！」

「そりやどうもっ！」

ほぼ同時に踏み込み、二本の剣がぶつかり合った。

銀色の刃を正面から受けても、赤い剣を収めた鞘は傷ひとつつかない。龍革の鞘は、さすがに頑丈極まりなかった。

だからこそ単なる棍棒なのだ。

罵りながら、剣を握ってルグナと斬り結んだ。

審判の声も、観客の声も遠く、水の中にいるようにはつきりと聞こえない。

視界には金色の瞳を光らせる少年の姿だけがあった。

ルグナは、強い。

師匠のような、高みにいる隔絶した強さではない。

競い合い、技をぶつけることで高め合うことができる領域にいる強敵だった。

ルグナも同じものを感じていると、確信があった。瞳の奥に、隠しきれない明るさが弾けていた。

こちらの剣がルグナの額を、ルグナの剣が自分の脇腹を狙い、突きが放たれる。

だが、自分たちの技が、同時に炸裂しかけたその瞬間である。

唐突に、何の前触れもなく、闘技場の上に黒い影が差したからだ。

頭上に現れた膨大な魔力の反応に、頭より先に体が反応した。咄嗟に剣を引き、全力で後ろに跳び退る。

直前に、とりあえずルグナを蹴り飛ばして距離を取らせた。

互いに後ろへと跳んだ刹那、開いた空間に風の塊が叩きつけられた。

砂が巻き上げられ、砂嵐が起きる。風が吹き荒れ、観客席から浮ついた悲鳴が上がった。

顔に叩きつけられる砂粒を避けるため、腕で顔を覆ったこちらの視

界に、ゆらりと立ち上がる人影が目に入った。

空中に現れた、黒く巨大な影。そこから、一人の人間が、跳び下りて来たのである。

風がさらに強くなり、闘技場を覆っていた砂嵐が吹き散らされる。晴れた砂幕のその向こう、仁王立ちになっている姿があった。

水底に澱む黒土のような、くすんだ色の髪を風にたなびかせ、銀の籠手や脛当てがついた簡素な青の衣を纏う、丈高い青年である。

腕に巻かれた白布にいくつも縫いつけられた、宝石のような磨き抜かれた黒い石が、天高く昇った太陽に照らされてよく光っていた。

青年の頭上、丸く区切られた闘技場の空を悠々と飛ぶのは、黒い鱗を光らせる巨大なドラゴン。

そのドラゴンの背に乗って圧縮した風の塊を闘技場に叩きつけ、祭りの闘技の只中に乗り込んで来た青年は、俯きがちだった顔を真っ直ぐ上げると、辺りを睥睨した。

ぴりぴりと、項が粟立つ、

「し、師匠……」

思わず、その名を呼ぶ。半ばそれは、反射に近かった。

ぎろり、と恐ろしいほどに鋭い紫の瞳が、砂塵を突き抜けて、鞘込めされた剣を握るこちらを射抜いたのだった。

## その二

黒いドラゴンと共に突如として現れた紫の瞳の青年の姿に、会場は水を打ったように静まり返る。

驚愕や畏怖などが織り交ざる視線を向けられながらも、彼は、彼らの視線などものともしていないふうには、無造作に歩み出した。

青年は——俺の、師匠は砂埃を手で払い、まるで街中で知り合いへと近づくような殺気も敵意もまるでないふうには、こちらへと進んで来る。

「し……」

しよう、と続けようとしたが、間に合わなかった。

その姿が視界から消え、瞬きの間に目の前に現れたのだ。

数十歩あつた距離を一步で詰めた師匠の手に握られているのは、根本を紐でくくつた白く細長い紙束。

紙束だからと侮れない、師匠手製の仕置き用武器だ。

外見は子どもの玩具みたいな馬鹿げた武器だが、まともにくらつた大の男が一人、天を舞つたことがある。

「し、ししよ、それちよつ、待つ………！」

「聞く耳、持たん」

問答無用に気合一閃。バシツ、という間抜けな音が頭に直接叩き込まれる。

一切の容赦なく振り下ろされる紙束、師匠曰くハリセンという名のそれは、見事に自分の脳天にぶち当たつたのだつた。

視界一杯に、きらきらと星が飛ぶ。

平面でなく、硬い縦面での一撃は頭蓋骨に響く。

火花が散るほど痛かつた。

気づいたら、地面にべしやりと倒れていた。頬の下に、ざらりとした砂の感触がある。



「お前もだ。ルグナ」

「えっ！ちよ、なんで俺もっ……!?」

ぐらぐら揺れる頭をもたげで仰ぎ見れば、言葉をぶった切られたルグナが同じようにハリセンで吹き飛ばされ、仰向けに倒れていた。

手足がまったく動いていないのだが、完全に気絶してしまいか、アレ。

自分は打たれ慣れているというか、叩かれる瞬間がいつ来るか、感覚でわかる。

だから咄嗟に脳天に魔力を集めて強化できたが、それにしたって視界がぐらぐらしている。慣れていないと、一撃で気絶ものだ。

ただの紙束で魔力防御をぶち抜いた当人、つまり自分の師匠は、すたすたと近寄って来ると、倒れたままのこちらの頭の前にしやがみ込んだ。

「一撃くらって意識があり、武器を手放していないことは褒めてやれる。だが、それ以外がなっていない。避けるなり受け止めるなりして、最低限頭を守れ。間に合わないならば、相打ち覚悟で脇腹にでも攻撃を当てろ」

ぐい、と返事も待たずに襟首を掴まれて地面から引き剥がされた。

自分とて小柄なほうではないはずなのだが、師匠に比べれば頭半分は小さい。

そのまま、ぞんざいに砂の上に投げ落とされた。尻餅ついた体勢のまま前を向けば、ぐい、と突き出される手。

綺麗な顔と逆に、胼胝や傷だらけの分厚い手の上に、自分は放せなかった剣を置いた。

師匠は鞘を握って、腰に差す。

片手に持ったハリセンでとんとん、と肩を叩き、相変わらず鋭い紫の瞳でこちらを見下ろした。

「俺に何か、言うことは？」

「…………師匠の剣、を、勝手に持ち出して、申し訳ありませんでした」  
「すぐ謝るならば最初からやるな、馬鹿者」

もう一度振り下ろされた一撃は、今度は後頭部にどかんと当たり、

自分はまたもべしやりと地面に伏せる。

だけでも、最初よりかなり手加減されていた。

師匠が昔、修行時代におもちゃとして作り方を教えてもらったというハリセンは、魔力を長いことかけて染み込ませた特別製となっているのだ。

多分、いや間違いない、ハリセンとは人を吹っ飛ばすようなものではないと思う。だって、元々はおもちゃの一つなんだろう。

どこの誰だか知らないが、とんでもないものを師匠に教え込んでくれたものだと、思わないでもない。

ふん、と鼻を鳴らした師匠は立ち上がり、辺りを見渡す。そのころには、自分にも周りの音が聞き取れるようになっていた。

会場は、蜂の巣を突いたような騒ぎになっていた。

上空では黒いドラゴンが旋回し、そこから本物のドラゴン乗り――

――【暗黒期】を戦い抜いた【五翼将】の一人、【黒】が現れたのだから、当然だろう。

何から何まで、自分のせいであるのだが。

闘技場の中心に立った師匠の背後に、コクヨウが、師匠の相棒が降り立つ。

その背中にひよいと飛び乗り、師匠は声を張り上げた。

「いきなり騒がせ、申し訳ない！俺はドラゴン乗り、【黒】のレトだ！今回は俺の弟子が場を騒がせたこと、心より謝罪する！」

合わせるように、コクヨウが吠えた。

多分師匠は、本気で、誠心誠意謝っているのだろうが、合わせてコクヨウが吠えてしまえば並みの人間は怯える一択だろう。

聞こえようによっては脅しているように取られなくもない。

ハリセンで叩かれた頭を押さえながら起き上がれば、同じようにルグナが頭を押さええて上体を起こすところだった。

目の前に聳えるドラゴンの両脚を見て、ルグナはうわ、と驚いた声を上げていた。

そしてこちらを見るや、立ち上がって駆け寄って来る。

「大丈夫か？結構いい音がしてたよな」

「別に。慣れてる。そつちこそ気絶してただろ」

「ああ！まったく避けられなかったからな」

元気なやつだと思いつながら立ち上がり、黒いドラゴンを見上げた。背中の鞍に仁王立ちになった師匠の言葉に、闘技場の騒ぎが収まるのかと言え、まったくそんなわけはなかった。

むしろ、何かの催事の一環なのではないかと、そんな声までが聞こえて来る。

「……困った」

ぼそり、と師匠が真剣に途方に暮れたように呟く声が聞こえ、ぐる、と喉を鳴らしたコクヨウの鼻から黒い煙がぷつぷつと吹き上がった。

多分師匠は単に、この剣を取りに来ただけだったのだろう。それから、勝手に飛び出した馬鹿弟子をしばきにも来たというところか。

自分が言えた義理はまったくないのだが、師匠とそのドラゴンが姿を見せたらそれだけで恐慌状態にもなる人間がいるのだから、『ちよつと顔を出して戻る』のは、無理だと思う。

「【黒】のレト様、ではハヤ選手は、弟子だと仰るのです？」

席から身を乗り出すようにして、解説役の男が尋ねていた。

「弟子だ。……少々、俺の持ち物を勝手に持ち出して参加していたため、追った次第だ。それからルグナは俺の……旧友の息子だ。弟子入りするからと迎えに来たというのに、約束の場におらずにここに参加していた。だからとりあえず、ハリセンをした次第だ」

思わず勢いよく横を見れば、ルグナが頬をかいていた。

何故師匠が、ルグナまでぶつ飛ばしたのかと思っていたが、そういう理由があったらしい。

見つけたので、だからとりあえずハリセンした、という師匠の論理は、突っ込んだら負けである。

ルグナはじつとこちらを見返した。

「仕方ないだろう。【黒】の人以外あの剣を持っている人間がいたら、それは追いかけるさ」

「俺のせい、ってわけだな」

「ある意味そうだな！」

ばしばしと肩を叩いてくるルグナは、からからと笑った。

師匠の旧友の息子といえ、こいつの両親はやはり彼らなのだろう。……ここまでのこいつを見るに、母親、父親のどっちにも大して似ていないように思うのだが。

龍の足元でござこそ言い合うこちらのことなど置いてけぼりで、師匠と解説役との会話は続いていた。

「俺の要件は既に済んだが、ハヤは連れて帰る。未熟者を、この場でこれ以上戦わせる許可は出せない」

「あ、あの……しかしそれでは、決勝戦が……」

「……そちらに、興行主としての事情があるのは理解している。しかし、ドラゴン乗りの弟子として、やってはならないことがある。ハヤはそれを破った。だから、試合をこれ以上続けることは師として認められない」

「そ、それは……」

淡々と、振り落ちてくるような師匠の言葉だけに、身が縮こまった。

師匠の口調に熱はない。熱はないのに、じくじくと体のどこかが打たれて、焼かれているようだった。

何もかも俺が悪いのだ。それはわかっていて、だけれど心の奥では言い訳にしかない叫びが上がっていた。

どうしても、どうしても諦められないことがあった。

誰に何を言われても、認められない事実があるのだ。

「おいハヤ、どうして剣を持ち出したりしたんだ？今、凄く後悔してるだろ。なんとなくわかるぞ」

「……黙れ。お前、感応能力持ちかよ」

【魔力持ち】の中には、何ら訓練を受けていなくとも、生まれついて高い精神感応力を持っている者はいるので。

彼らは恐るべきことに、なんとなくで人の心が読めるという。

自分はドラゴン乗りではない【魔力持ち】の、しかも欠陥品で、そんなことは勿論できない。

ドラゴン乗りとして訓練を積み、後天的に精神感応力を持っている

師匠や姉弟子相手となると、まったく隠し事ができない範囲だ。

普段はそこまで人の心に踏み入るのが失礼だからと、二人ともいきなり人の心を読んだりほしくないように制御してくれているが。

「そうね。だけど今度から、制御なんてぬるい真似、やめてしまおうかしら。ねえ、愚弟」

背後から聞こえる玲瓏な声に、今度は体が固まった。

見なくてもわかる。砂を踏んで歩いてくる軽やかな足音が、聞こえる。

今このとき、絶対に会いたくない相手だった。

「あらご挨拶ね。師匠が来るなら、私が来ていると思わなかったの？」  
肩越しに振り返る。

そこにいるのは、自分と同じ色合いの黒髪の少女だった。

だけどその瞳は自分と同じ黒ではなく、青みを帯びた藤色だ。

左眼の下には、くつきりとした龍の鱗に似た痣もある。

肩上で切り揃えられた黒髪に留められた、白い五枚花卉の髪飾りが、唯一の飾りらしい飾りで、服装はこれも自分が来ているものと同じ、見習いの服だった。

「……ホノメ」

名を呼ぶと、姉弟子にして見習いのドラゴン乗りであるホノメは、につこり微笑む。

しかしそこにある気配は、刺々しいの一言だった。

彼女は俺を愚弟と呼ぶが、こちらは弟ではない。弟弟子である。

「アメノなら置いて来たわ。だってコクヨウとアメノが揃っていたら、怖がらせてしまうもの」

「もう十分怖がらせてるだろ。ホノメはどうやってここに来たんだよ」

「そうなったのは誰のせいかしら。どこかの馬鹿弟子が師匠の大切な剣を持ち出したからこんなことになったのよ。自覚、あるの？それに、普通に歩いて気配を消して入って来たに決まっているじゃない。師匠の騒ぎに紛れたんだから、そんなこと簡単よ」

微笑めば微笑むほど怖いホノメに、自分は何も言えなくなる。

だって、その通りだからだ。

まさか師匠がコクヨウで乗り込んで来るとまでは思っていなかったなんて、ただの言い訳に過ぎない。

自分には扱えないあの剣が、師匠にとってとても大切なものだというのは知っているのだ。

俯きそうになりながらも、頭は下げない。項垂れて終いに出来るならば、最初から勝手に持ち出してこんなところにまで来てやしないのだ。

歯を食い縛る自分を見てどう思ったのか、ホノメは苛立ちを抑えるようにこめかみを指で叩いた。

ホノメの指も手も、師匠や自分と同じように胼胝や豆、重なった傷跡で硬くなっていた。

「あなたのしたことは、あり得ない愚かさよ。愚弟。巫女の剣を持ち出すなんて、本当に前代未聞。帰ったら覚悟してなさい。コクヨウに齧りたいの？」

え、と声を上げそうになった。

ホノメが巫女と呼ぶのは、一人しかない。

【赤】の巫女、アジイザ。

師匠が契約しているドラゴン、コクヨウのかつての相棒であり、世界を救ったと言われる五十年前のドラゴン乗りのことだ。

その彼女が持っていた剣が、あれだったということ、らしい。

「師匠、そんなことは一言も」

「知らないことは罪。帰ったら扱くからね」

腕組みをして言い放った姉弟子は、そこでようやくルグナの方を向いた。

「はじめまして。あなたはルグナというのよね。私はホノメ。こっちの馬鹿ハヤの先輩で、あの人の弟子。改まった口調はやめてね」

「わかった。確かに俺はルグナだ。……ところでこの状況、一体どうするんだ？」

この状況とは言うまでもなく、自分たちの頭の上で起きている大騒ぎのことである。

うん、いや、まあ、こちらの罪悪感とか丸ごと脇に置いて考えれば、準決勝にいきなり【五翼将】の名を持つドラゴン乗りがドラゴンと共に現れ、選手二人を一瞬でぶっ飛ばしてそのうち一人を連れて帰ると宣言したのだ。

……どうするんだろう、これ。

尚、師匠が口先三寸でどうにかする、或いはできるといふ方向は最初からない。あの人は口下手が過ぎる。

これに関して、ホノメと自分の意見は完全に一致だ。

口にしないで、目を見ればわかった。

このまま、自分とルグナを連れて帰ると主張する師匠と、そうなる  
と決戦がまともにならないと引き留めようとする解説役の男は押し問答に突入していた。

年に二回開かれる【闘技祭】は、潰せないような大きな祭りだ。演劇の大舞台の、最後の幕となれば、簡単に潰せるようなものではない。

東の間黙った師匠は、ぽんと手を打った。

「わかった。要するに、闘技が盛り上がればいいんだな？」

「はっ。」

「ならばこうする。……ホノメ、ハヤ。俺と戦え。一対二だが、盛り上がりはするだろう」

驚きで声を上げなかったのは、これまでの付き合いの賜物だった。

師匠、とホノメが勢いよく叫び、鞍の上に立ったままの師匠は、首を横に傾げた。

はい、とルグナが勢いよく手を上げる。

「すみませんレトさん!!俺も二人と一緒に戦いたいです!駄目ですか?まだ弟子じゃないからいけませんか?」

「……その二人とお前は連携したことがないからと思っただが、自信があるのか?」

「ホノメさんの戦い方はわかりませんが、ハヤの戦い方を俺は見えました!なんとか合わせられると思いますー!」

「なら、お前も入れ。では、ホノメ、ハヤ、ルグナ。三人でかかってこい。安心しろ。コクヨウは戦わない。ドラゴン乗り同士の果し合い

に、ドラゴンは立ち入らない決まりだからな」

それでいいか、と師匠は解説席で目を白黒させている男を見やっ  
た。

【闘技祭】の最後を飾るのは、ドラゴン乗りと挑戦者の一騎打ち。そ  
れが決勝戦とされているのだ。

勝ち抜いた一人が、【五翼将】に挑戦できる権利を得る。

無論、ドラゴン乗りとそうでない人間との戦いの結末などはわかり  
切っているが、それでも、【五翼将】が姿を見せるだけで、場は盛り上  
がる。

自分がここに来た目的も、その戦いが目的だった。

師匠以外のドラゴン乗りと、戦いたかったのだ。戦うために、こん  
な無茶までやらかした。

決勝に現れる【五翼将】の役は持ち回りで、師匠は二年ほど前にし  
かめ面ながら参加していた。

今回の大会でその役を担っているのは、【緑】ではなかっただろう  
か。

彼も確か、五十年前の戦いを知っている世代のはずだ。

だから、師匠のやり方でも大会の趣旨は覆ったことにはならない  
が、同時に自分の目的は果たされないことになる。

いや、大会の趣旨としてもどうなのだろうか。一対三という変則的  
な形で、しかもその内一人が、大会の参加者ではないのに。

「どうだ、これでは駄目か？」

紫の瞳を細めて尋ねる師匠と、ぐるると喉を鳴らすコクヨウ。

当人たちにそんなつもりは欠片も無くとも、たった今闘技場に砂嵐  
を巻き起こした人間の提案と、尻尾の一打ちで闘技場の外壁を軽く叩  
き壊せる龍の唸りは、迫力が桁違いだ。

「し、少々お待ちください！確認して来ます！」

結果、男は席を離れて一度裏側へと駆けて行った。

この祭りの主催者に、伺いを立てに行っただろう。

そういうふうな駆け回る人を見ていると、改めてとんでもないこと  
をしてしまったという気がじわじわと染み込んで来る。



自分が師匠の剣を勝手に借りて参加しなければ、こんな大騒動にならなかったのは、確かだった。

「師匠、一応尋ねますが俺たちに拒否権は？」

「あると思ったのか？」

コクヨウの鞍から跳び下りた師匠が、まったく曇りない紫の瞳で問い返して来た。

乗り手が降りた龍は、一声吠えて飛び立ち、すり鉢状の闘技場の一番高い壁に、巨大すぎる鳥のように止まる。

その威風に、近くの席に座っていた人々がざわめくのが見えた。

ともかくもこれで、闘技場は開いたのだった。

はあ、とホノメがため息をつく。

「拒否権なんて、あるわけないじゃない。ハヤ、腹を括りなさい。あなた、自分の武器はどうしたの？」

「控室に置いてる」

「取って来なさい、今すぐに。手に馴染まない武器で、師匠の相手ができるわけないでしょう」

こうなったら見世物でもなんでも盛り上げるわよ、とホノメは宣言した。その瞳は、さつきこちらを見ていたときのような棘はなく、輝いてすらいる。

状況や、自分がやらかしてしまったことはともかく、師匠に稽古で真剣で以て相手をしてもらえるのは、嬉しいか、嬉しくないで言えば、嬉しい。

厳しいが、だからこそ強くなれるからだ。

「わかった。……じゃあ、行つて来る」

「早く戻りなさいよ」

棘だらけに聞こえるホノメの声に見送られ、自分は走り出した。

もうどうなっても、自分の目的は果たせないと、苦い思いを噛みしめながら。

ともあれかくもあれ、こうして自分がやらかした馬鹿の一言では済まないような無謀な挑戦は、終わった。

結果など、言うまでもない。

師匠の提案を受け入れた上で開かれた一対三の戦いで、自分たち三人は、それはもう見事に枕を並べハリセンと剣を持った師匠に鎧袖一触されたのだった。

……せめて、こんなときくらいハリセンは置いてほしかった。

### その三

「なんなのだ、【黒】よ。お主の弟子は馬鹿を引き起こす輩ばかりになるのか？」

「……お前には、迷惑をかけた」

「構わん。言うほどの迷惑ではない。正直なところ、客寄せのへびにならんで済んで、清々しとる。あの祭りも、まア、丸つきり無意味とは言わんが、あんなぬるいもの捧げられても、あのチビは困るだろうなア」

「それでもない……と思う」

衝立越しにそつと向こうの様子を伺えば、呵々、と笑う巨漢の髭面がいる。

彼と並ぶと、師匠は細くすら見えた。

結果的に、【闘技祭】をめちやくちやにした自分とルグナ、それに乗り込んで来た姉弟子のホノメは、隣の座敷から聞こえる声に、三人揃って小さくなるばかりだ。

こんな闘技場から離れた外れの食堂に、なんだって【五翼将】のうち、二翼までが揃うのだと思いつつ、自分はそつと隙間から【緑】と【黒】の顔を覗き見た。

契約した龍の鱗の色にちなみ、【緑】、【黒】、【紅】、【白】、【黄】という二つ名がある五人のドラゴン乗りは『格上』とされている。

昔は違ったそうだが、今の時代、色の名をつけて呼ばれるドラゴン乗りは、それだけで特別なのだ。

彼らに命を下せるのは、長である【黄金】だけ。各国の首長や王でさえ、おいそれと上から物を言えない存在とされている。

何故かといえば理由は単純。

【五翼将】の彼らと彼らが契約した龍は、それだけ強いからだ。

ドラゴンが本気で暴れたら、一頭で小国など三日で滅びるとまで言

われている。

生きる自然の暴威とその乗り手を、人間の国が無碍にできなくなるのは、至極当然だった。

だからといって、ドラゴン乗りたちが増長するとか、権力を笠に着るようになるのかと言えば、そんなことはない。

ドラゴンとの契約は、絶対ではない。ドラゴンの意思一つで、いつでも砕くことができる。

彼らが人間に欲するのは、あくまで、仲間の龍同士で共闘できないほどの寧猛な性質を抑えるための『楔』であり、共に戦える『戦士』なのだ。

自分たちに騎乗する資格がなくなったと判断すれば、龍は遠慮なくその乗り手を喰らう。ドラゴンの力の前には、人間種は等しく無力だ。多少魔力が強いとか弱いとか、何も関係がない。

ちなみに、龍が乗り手の体を食べるのは何も残虐に殺してやろうと思つての行動ではない。一時であろうと、自らの背中を預けた戦士への最後の手向けなのだとか。

正直、喰われて殺されるのも寝床の上で殺されるのも、死ぬほうからすれば変わらない死だと思ふのだが、ドラゴンにとっては違ふという。

そうやって食べられた乗り手は、【羽墮ち】と呼ばれる。彼らは翼の無くなった者であり、翼に値しなくなった者なのだ。

五十年前にはそんな言葉すらなかった。

【羽墮ち】は、魔族を結界のあちら側へと押し返してから生まれたのだ。

「また質が下がったのか？リユイロン」

「なんとも言えん。幸い、【羽墮ち】は出とらんし、卵の数も順調に回復しとるが、そもそのドラゴンが乗り手を選ばんくなつとる。お主や他の【五翼将】の弟子どもは優秀だが、それ以外の輩は大体察しろ」  
「……無理もない、とは言えないな。間に合わなくなる」

「応ともさ。レグルスのやつも頭を痛めとるが、人はなかなか育たん。追い詰められでもせん限り、な」

話の全容はわからなくとも、大まかはわかった。  
五十年、この世界は平和だった。

人やドラゴンの数は増えたが、「暗黒期」のドラゴン乗りたちと今のドラゴン乗りたちを比べれば、その実力は明らかに下がっているようだ。

中には、師匠のように修行を積んでドラゴン乗りの中であつても化物と呼ばれるほどに強くなった者もいるが、全体で言えばそれは少数だ。

「なあ、なあハヤ！これはとても美味しいな！この街の飯とは美味しいんだな！」

「……」

で、そんな重い空気の隣の空間。

衝立で仕切られたこつち側の座敷には、香辛料が効いた肉と野菜の濃い茶色い煮込み料理を頼張る馬鹿、じやなかったルグナがいた。

「それはカレーって名前の料理よ。この店から広がった街の人気料理。元々は野営地で出されてた料理だったそうだけど」

「そんなのどうでもいいだろ。ルグナ、お前もう少し静かに食えよ」

「悪いな！だが美味しいものは美味しいんだ！よく食べる兄上の飯は……少しアレな味でな」

「知らねえよ。誰だよ兄上」

「兄上は俺の兄上だな。怒ると怖い！」

左様ですか、と向かいの席に座ってカレーを頼張るルグナを見やっ  
た。

闘技場で苦もなく自分たち三人を瞬殺したあと、飯食ってから帰ると師匠は言い、連れて来られたのがこの飯屋だった。

店の場所は路地の奥でわかりづらく、入り口には布がかけられていて中が見えないようになっていたが、入ってみれば意外に広く、天井も高い。

この街に来るたび、師匠は毎回ここに来る。何か理由があるからなのか、単純に飯が美味しいからなのか、それは聞いたことがなかった。「ハヤ、ここには何回来たの？」

「二、三回。それが？」

答えると、ホノメは呆れたように片目を瞑った。

「それだけ来てるのに知らないなんて、鈍いわよ。この店の料理、巫女が好きだったそうよ。カレーって名前も、あの人が言っていたのをそのままつけたらしいわ。元はただ、有り合わせの煮込み料理って教えられたわ」

「そんなこと、なんで知ってたんだよ」

「私たちの姉弟子だもの。あなたが興味無さすぎるだけ」

ホノメの視線は、冷たい。

いつものことで、冬の朝の空気のようなこの視線にも慣れてしまった。

確かに、既に龍と契約できた姉弟子からすれば、【五翼将】から直々に修行をつけてもらいながら、まだどうにもこうにもなっていない俺は、齒痒い弟弟子なのだろう。

それとも、もう諦めたほうがいいと、思われているのだろうか。

そう考えるだけで、腹の底が炙られたように思う。

絶対に嫌だ、とやけ気味にカレーという名前らしい料理を飲み込む。どろりとした、香辛料が効いたスープが喉に刺さる。

盛大に、噎せた。

「む、大丈夫か？」

「もう、何やってるのよ！店員さん！お水！水のおかわりちょうだい！」

「……いい、いら、ない」

喉に魔力を流し、強制的に喉をならして呼吸を戻す。

自分はこういうふうには、体内に魔力を巡らせることは得意だ。これだけは、姉弟子よりも上で師匠にも上手いと言ってもらえる。

なのに、体外へ放出するとなると、途端に上手くいかない。

だからこそその、欠陥品なのだ。

「おい、坊主と嬢さんたち大丈夫か？」

喉は治ったのに、ホノメの声のせいで、店の奥からは店主らしい老人が水入れを持って出てくる始末。

もう何もかもしくじる自分が情けなくなつて、卓に突つ伏したくなつた。

「慌てて食うからんなことになんだよ。その料理、赤毛のチビも、慌てて食つたときにや咳き込んで大騒ぎしてたからなあ」

他に客が数組しかいないからか、老店主はそう言いつつ俺たちが座る座敷の端に腰掛けた。この人はいつも、師匠が店を訪れると出てくるのだ。

腰は少し曲がっているし、顔や手は皺だらけだが、老いたと思わせる何かがある人だ。怒ると怖く、食べ物を粗末にするなら客であろうと叩き出す頑固爺と評判だった。

「ご店主、赤毛のチビとは誰のことだろうか？」

「決まつてるだろ。お前らの師匠の相棒やつてた赤毛のアジイザさ。昔はよく、儂の飯を食つてたがなあ」

「店主」

【緑】との話し合いは終わったのか、衝立を横に退けながら、やや眉を吊り上げた師匠が口を出す。

店主はそちらを見て、肩をすくめた。

「久しぶりに顔出したと思やあ、闘技場で暴れた帰りなんだって？ 幾つになつても変わつてねえなあ、落ち着きないところはよお」

「店主は……老けたな。店と味は変わらないが」

「失礼なやつだな。お前さんが老けなさすぎなんだよ」

「そういう契約だからな。飯、美味かった。ご馳走様だ」

「そうかよ、それじゃあ儂の奢りだ。もう一杯食つてけ」

いやこれ以上は、とかなんとか、師匠は断ろうとしたらしいが、店主は一顧だにせずに一度戻り、師匠の前に料理の皿を置いて、また店の奥へ引つ込んでしまった。

寸の間途方に暮れたような顔をした師匠は、結局自分の器を持ってこちらの卓へとやって来て、すんとルグナの隣に座った。

卓は四人掛けだから、これで席がすべて埋まったことになる。

一方のリュイロンは、立ち上がるとからりと笑った。

「ではな弟子ども、よく学べよ」

生きる伝説の一人は、そう言って店を後にした。残ったもう一人は、出てきたカレーをもぐもぐと頬張っている。

「師匠、今年でお幾つなんでしたっけ？」

「確か七十一だったと思うが、それがなんだ？」

全然見えねえ、と呟いた途端、ホノメの踵が脛に入った。何するんだと横目で睨めば、ふん、と鼻息荒く返される。

だが次の瞬間、ぴし、と二人同時に額に何か小さなものがぶつかる。師匠が飛ばした、極小の風の塊だった。

「人前で喧嘩をするな。お前たち、もう成人したろう」

「……わかり、ました」

「……はい」

「わかればいい。それから今日のことだが……二度とするなよ、ハヤ。コクヨウが怒り狂ったら、さすがに俺でもそう長くは止められない」あの剣は、コクヨウが昔契約していた乗り手の形見だ、と師匠は何でもないことのように告げた。

「今でもあいつはその乗り手が忘れられないし、剣に残った魔力を懐かしんでいる。この剣が、ドラゴンの宝物だと伝えていなかったのは俺の落ち度だが、いいか、二度とするな。いのちの保証ができかねる」

師匠の言葉には、師匠自身の怒りという感情が感じられなかった。つなぎ合わせた話を聞くと、それはコクヨウの宝物であるだけでなくて、師匠の宝物なのではないだろうか。

遠い昔に、この世界を守る結界をつくるために死んだ俺たちの姉弟子で、師匠のかつての相棒だった人の、形見なのに。

なのに、それを勝手に持ち出した弟子に対して、かける言葉が優しすぎた。知らなかったなんて、なんの言い訳にもならない。

香辛料を食べて温もっていた体が、一気に冷えた気がした。

項垂れ、俯くことだけは気力で抑えて、自分は一言絞り出した。

「……ごめん、なさい」

「もういい、謝るな。さっきハリセンで二度叩いた。一度目が俺で、二度目がコクヨウの分だ。それでコクヨウの溜飲が下がった。……心配をかけるな、馬鹿者」



そこまでを言って、師匠は匙を置いた。

器の中身は、既に空だ。食べるのが速かった。

「次はお前だ。ルグナ。何故約束の場所にいなかった。ホノメがあちこち駆け回ったんだぞ」

「はい！申し訳ありませんでした！」

声がかかった。耳がきいん、となる。

そうは思いつつも、こいつが約束の場所とやらに現れなかった理由は自分にあるのだ。

す、と手を上げた。

「師匠、すみません。それも俺のせいです。こいつ、街で俺のこと見かけて、剣を持つてるのが怪しいから後つけて、大会に参加したんだそうです」

言ってしまうえば、ルグナがあそこにいたのはその場のノリと勢いだけ。

それだけで準決勝まで進めた辺り、こいつの実力はどうなっているのだろう。

それにさつき、師匠はルグナが弟子入りするためにこの街に来たのだと言っていた。

ホノメとアメノ、師匠とコクヨウ、それに俺は、数日前からこの都市に来ていた。

師匠は用事があると言って出かけ、ホノメは行きたいところがあると言って別れた。

残された自分の目に留まったのが、あの剣だった。

外から聞こえて来る【闘技祭】の開催を告げる声がやけに大きく聞こえて堪らなくなつて、気づいたら自分は剣を掴んで飛び出していたのだ。

師匠は今日、向かうところが向かうだけに本格的な武装はできないと言つて、あの剣を置いて行っていったから。

多分、向かう先の一つにルグナと会う場所があったのだろうと、今ならばわかる。

「じゃあ、私の駆け回った分も、アナタのせいなの、愚弟？」

「ある意味じゃな。だから悪かったって言っただろ、姉弟子」

一番悪いのは自分で、自分自身そうとわかつている。なのに、ホノメに対しては何故こうもひねた言い方しかできないのか。

この姉弟子の前ではいつもこうなってしまう自分が嫌で、隠すように水を飲んだ。

この街は海に近いが、ドラゴンが手伝ってまでいい水脈が見つけれれたとかで、水は豊富なのだ。

元々、この街があつた場所には魔族との最前線基地の一つが造られていたという。

五十年も経てば、変われば変わるものなのだ。

そうやってつらつらと物思う自分と、それを睨む姉弟子の間に割つて入るように、ルグナが口を開いた。

「ある意味ではそうかもしれないが、連絡を怠つたのは俺だ。レト殿もホノメ殿にも申し訳なかったと思う」

「殿は不要だ。発端がわかればもう良い。ただ、行きがかり上お前の兄には連絡を入れたが」

言われた途端に、さつ、とルグナの顔色が変わる。

「兄上に？」

「お前の身元保証人……というか、あいつらが近くにいない以上は、この街でのお前の保護者だろう？まあ、俺たちで見つけると言つたし、見つけたとは伝えたから。探し回っていたりはしていないと思うが」

「それは……ありがとうございます」

「気にするな。俺も、お前の兄には世話になっているからな。付き合いはそこそこある」

さつき話しに出た飯マズ兄上のことだろうか、とルグナの顔を見て思う。

「師匠、有名だったりするんですか？その人」

「ドラゴン乗りではないがな。【魔力持ち】で有名な医者だ。魔力義体師のシユティラと言えればわかるか？」

「わかりますよ。有名人じゃないですか……え、その人がルグナの飯マズ兄上？」

ルグナの兄だということとは、当然、あの家の出だということになる。遠目から見たことがある、あの怒るとおっかないと噂の人と、目の前のこいつの姿は重ならなかった。

「飯マズではないぞ！兄上は健康に良い料理しか作らない人だから、自然そういう材料を使うことになるだけだ。それにあの人は家の名前を出されるのが嫌いなんだ」

「要するにあれだ。あいつの作る飯は、とびきりの良薬だ。だがまあ、良薬は口に苦いだろう。あとは察しろ」

「兄上は、実家の七光りと言われるのが我慢ならない性格なんだ。だから、知ってるやつのほうが少ない。……偽名まで使ったくらいだから」

いくらなんでも実家嫌いを徹底し過ぎだろうと思うが、なんとなく納得できた。

育ち盛りにとっては物足りなさそうな、そういう薬草飯を作る人のだろう。

多分、いや間違いなく、ホノメが作っていた薬草たつぷりの料理と似ている気がした。

「なんでこつちを見るのかしら」  
「別に」

そう、別に、意味なんてない。

ないのだから、ホノメの藤色の瞳から目を逸らした。

「それである、レト殿？」

「殿はいらない。師匠でいい」

「はい！では師匠！俺は弟子入りを認められたということなのでいいのでしょうか？」

「いい。認めたから今日、ここに来たんだ。だが何もなしというわけでもない。ルグナ、ハヤと戦え。戦い方をすべて見る」

「なるほど、わかりました！」

「は？」

いやわかってない。自分は何も聞いてないと、思わず声を上げれば、師匠は紫の眼を光らせてこつちを見た。

「行き先も告げずに抜け出したのだから、それくらいはやれ。兄弟子になるんだろうが。抜けない剣ではなく、刀を使ってやれ。お前の全力でだ」

師匠の視線は、自分が横に置いた武器に注がれていた。

黒塗りの鞘に収まり、朱色の柄を持つこれは、故郷に伝わる技術で作られた刃物だ。師匠やホノメ、ルグナが扱う両刃の剣と比べれば華奢にすら見える。

身は細く片刃で、反りがある刃を持つこの武器は刀。自分の故郷に伝わる、古い形の得物だった。

それを扱う技も、確かに自分は持っている。だけど、普段は使わない技なのだ。

魔族という化物相手には、叩き切るための剣や吹き飛ばす魔力のほ  
うが効く。

自分の技は人が人を斬り、守るために生まれて育まれたものであつて、斬られようが燃やされようが怯まない、屍だらけの化物たちを相手にするためにつくられたものではないのだ。

無論、師匠もそれを知っている。

刀での戦い方を習うためだけに、山を越えて自分たちの隠れ里に侵入してきたくらいなのだから。

北大陸から逃れて来た、僅かな人間たちが息をひそめ、身を寄せ合うようにして暮らしていた、あの小さく閉じた集落に。

だが結局、今日の自分を顧みれば、頷く以外にない。

これでやれないとはさすがに言えなかった。

「わかりました」

膝の上で手をきつく握って答えた自分に、師匠はそれでよいと頷きを返してくれたのだった。

## その四

自分には、才能がない。

そうと言われたのはいつだったか。

言ったときの師の顔はもう思い出せず、ただお前には才能がないという言葉だけが、重石のように胸の奥に沈んで固まって、動かせなくなった。

才能。

才能とはなんなのだろうか。

誰より速く人を斬り殺せたら、才能があることになるのだろうか。人がどう動いてこちらを殺そうとするか見抜いて、やられる前にやれたのなら、才能があると言われるのだろうか。

そんな才能よりも、日々の糧を得るため働ける穏やかな心が、誰かと笑い合う平穏な日々が、ほしかった。

できるならば、そうやって生きたかったのに。

だけど、生まれる場も時間も、選ぶことはできない。

選べないからこうやって、自分はこの手に刀を握るのだ。

都市から出て、龍の翼で飛ぶこと約一時間。そんな人が近づかない山の上が、刀を手にすることを選んだ自分の、今の『家』だ。

人里離れたところに住む理由はある。

ドラゴン二頭が同じ場所に住んでいる以上、それなりに人里から離れて、かつ咆哮が轟いたり地面が抉れたりしても、問題ない場所であればならない。吠える声で街の住人が眠れなくなったら洒落にならないし。

それなりに大きく作られた平屋の前、土がむき出しの楕円形の広場にて、ルグナと自分は向かい合っていた。

昨日の【闘技祭】でのあれこれがあつた翌日の、朝早くである。

薄い紫の鱗を持つドラゴン・アメノと、黒い鱗のコクヨウは、円の

縁で岩のように丸まっていた。

師匠はその隣で腕組みをして仁王立ちになり、ホノメは自分とルグナの間立っていた。

ホノメは、審判だ。

ドラゴン乗りや見習いの中では、決闘ひいては対一の戦いというのは割と起きる。こうした戦いにはドラゴンは絶対に手を出さず、人間同士の武術や魔力だけで争うのだ。

自ら負けを宣言するか、戦闘不能にされるか、審判の判断で強制的に止められるまで、戦いは止まらない。

ただし相手を殺したら、殺したほうの負けになる。

どちらの言い分にも一定の正しさがあるならば、戦って勝ったほうの言うことに従う、という不文律のようなものがあるため、こういうやり方が受け入れられることになるのだ。司直の手にかからないような揉め事は、こうやって解決されることが多い。

やっぱりドラゴン乗り、頭の中までドラゴンに浸食されているのは、と思うのはこういうところだ。殴った力の強いほうが正しいって、それでいいのか人間種。非力な生き物なりの理性はどこへ行った。

今回はただの手合わせだが、基本的なところは変わらない。

「お前、こういうのしたことあるのか？」

「兄上と手合わせならしたことがあるぞ。勝ったことはないがな」

「……左様で」

兄弟揃って【魔力持ち】での手合わせとは、大概周りがひどいことになるそうだった。

「もういいのかしら、始めるわよ」

「ああ」

「わかったー！」

言って、自分は腰に差した刀を、ルグナは同じく腰に下げた剣を抜いた。

ルグナが手に持つ飾り気も何もない、普通の両刃の剣は、師匠やホノメが扱うものと同じ形をしていた。

量産型で癖が小さく、特化していない代わりに、壊れても替えが利きやすい武器。

引き換えこちららは、剣に比べれば細く華奢に見える刀。

変に振るえば折られるなこれは、とルグナの構えを見て思った。

片脚を、僅かに後ろに引く。刀を両の手で構えた。

構えは【四相】。どう打ち込まれても対応できるようにと作られた、万能の形だ。

が、万能なんて所詮あり得ない。

単に、他の技へ最も繋げやすい形をしているというだけだ。

ホノメの片手が上がる。あれが振り下ろされたときが、始まりの合図だった。

「では……はじめー」

ルグナが動いた。

剣を構えての突進。両刃剣は、間合いを詰めて叩き切るか突く技が最も強い。

ルグナは速い。自分の体格ならばこれをまともにくらうだけで、吹き飛ばされて終わるだろう。

そう思いながら、足さばきだけの最小の動きで突進を避けた。避けたその勢いを乗せて、刀をルグナの背中に振るう。

が、軽い衝撃と共に刀が弾かれた。

魔力障壁、と判断する。

だがどうして、俺が刀を振るう場所に的確に張られていたのだろうか。

だが、狼狽えない。

そんな理不尽、よくある。

刀を即座に引いて、反転し終えていたルグナの眉間目がけて刀を振り下ろす。

これはルグナの剣で弾かれた。刀を破壊されるのはまずい。

両脚を魔力で強化して飛び退り、着地と同時に再度地を蹴る。

数十歩の距離を一跳びで詰めて、狙うは左腕。——これも、見る前に障壁で弾かれた。

ルグナは、こちらの速さに完全には反応できていない。気づいてはいるようだが、体の速度が追いついていないのだ。こいつは俺より遅く、素のままでは反応できていないはずなのに防がれている。

まるで、こちらがどう動くかわかっているように。

攻撃を躲しながら思考し、そういうことかと舌打ち一つして距離を開けた。

「お前、感応力使ってるな。俺の心、読んだろ」

「ああ！全力と言われたのだから使うさ。それにしても、動きが読めても速いな！闘技祭とは雲泥の差だ！」

「……」

【闘技祭】のときは、本来の得物でなかったからだ。

使いにくい棍棒擬きのような戦い方しかできない、鞘に入ったままの剣では、それ相応の動きしかできなくて当然。

「へえ。思ってたよりちやつかりしてやがるんだな。声がデカイ馬鹿かと思ってたが」

「普通にひどいことを言うなアンタは！」

「うるさい。声が大きい」

精神感応力者とはいえ、並みの力では相手がどう動くか、どう戦うかなど普通はわからない。

その上、相手の心を読みながら、目まぐるしく戦いながらその動きに対応し、魔力障壁をその瞬間だけ張って応戦できる者は、もつとしない。

どれだけの訓練を積んだらそれができるようになるのだろう。それに訓練を積んでも、必ずできるようになるわけもない。

ルグナは紛れもなく、戦うための才能がある人間なのだろう。

それも、人相手の戦いだ。

魔族の精神に接触しようとするれば、発狂の危険があるため、読心能力は魔族には使えないのだ。

あいつらは精神構造がこちらと異なり過ぎ、触れるだけで毒にな



る。

そんな、無用の長物にもなり得る技を使いこなしてくるあたり、ルグナは恐らく人を相手にしたことがある。わざと煽つても、まったく揺らがなかった。

ともかくもこれでは、千日手に陥りそうである。

こちらは相手より速く動け、人相手での剣技では恐らく上。

だが相手はこちらの心、というよりは動きを読め、魔力を放出して戦うこともできる。

その技を使われたら厄介だ。

さっきの突進技もそう。

当たるだけで、魔力障壁など張れないこちらは吹っ飛ばされてそれで終わり。ルグナのように心を読むことは、自分にはできない。

だけど、師匠ほどじゃない。

届かない領域にいるあの人よりは、こいつはまだやりやすい。

引きずりおろせるところにいる。

心を読まれて、だからどうした。それが何だ。読まれても問題ないよう動けばいい。

刀を鞘に戻し、腰を低く落とす。視界の端も端で、師匠が組んでいた腕を解くのが見えた。

こちらの構えを見て、ルグナが剣を動かす。心が読めるならば、自分が今から何をしようとしているのかも、わかるはずだ。

わかった上で、その理解ごと斬ればいいのだ。

脚に魔力を流し、力を込める。

一時的に跳ね上がった身体能力のまま、自分は一直線に前へと飛び出した。

ルグナの足元、一瞬視界から外れるほどに低く体を落とし、抜刀。横薙ぎに刀を振るい、狙うのはルグナの首だった。だがしかし、キン、と軽い音と共に刃が止められた。

魔力障壁の向こうで、ルグナの剣が動く。それより先に、自分は刀から手を放していた。

その場でさらに身体能力を強化。体を横に倒し、ルグナの剣を躲し

ざま、その横腹を全力で殴りつけた。

手応えあつたのを感じながら、さらに加速。刀が地に落ちる前に宙でそれを掴み取り、反転。

脇腹を強かに打たれて、体勢を崩していたところにさらに足払いをかけ、倒れたルグナの首元に刀を突きつけた。

この距離ならば、障壁を張るより前にこちらが刀を一振りすれば首を斬れる。

そう判断して、薄皮一枚に触れる手前で、自分は動きを止めた。

「そこまで！」

ホノメの一喝が入る。

入ったと同時に、自分は息が切れて膝をついた。

何度も段階を踏んで体を強化したとはいえ、反動で体のあちこちが痛い。

そのうち収まる痛みだとしても、毎度こうなるのは本当にどうにかしなければならなかった。

「すごいな！負けた！完敗だ！」

こつちが無言のまま痛みに悶絶していると、またも大声がした。だから頭に響くというのに。

これだけ言ったのに声の音量が全然下がらないあたり、お前俺のこと嫌いなのかと地面に座り込んだまま睨むと、欠片も曇りが無い瞳がこつちを見ていた。

勝ったのは自分だ。

なのに、こうして無様に地に蹲っているのも自分。

ともかくも刀を鞘に戻し、歯を食い縛って立ち上がった。ルグナが差し出してくれていた手は、取らなかった。

「アンタの動きは見たことがないが、どこの武術なんだ？武器の形もまったく違うな！」

「北」

「む？」

「北大陸の技だよ。お前が見たことないのは当たり前だ。人と戦うための技だからな」

「それを何故、使えるんだ？」

「さあな」

もう失われたはずの技を自分が扱える理由を、今、こいつに言う気は起きなかった。

ホノメと並んで近寄って来た師匠の方を向く。

「師匠、それで結果は？」

「合格だ。……ハヤも、見事だった。動けるか？」

「問題ありません。慣れてるんで」

人と戦うための技だけは、自分は負けられない。刀を手に刀術を用い、人間と戦って負けるような自分には、価値などない。

ホノメにも、勿論ルグナにも負けられない。尚、師匠は除く。この人はヤバい。

ヤバい御仁は、いつもの無表情でこちらを見下ろしていた。

「反省会だ。……ルグナの魔力障壁があと少し速かったら、拳は弾かれていただろう」

「そうですね。でも、張るより先に殴れたから問題ないでしょ」

「だが、強化の反動で動けなくなっていたのが致命的だ。僅かな時間とはいえ、首を落とすには十分な時間だった。反動が軽くなるよう、身体強化をさらに磨け。お前は自分の内部に魔力を巡らすことが上手いから」

「わかりました」

基本、勝っても師匠はこうだ。

負けてもあまり変わらず、淡々と指摘して課題を示す。

こちらの動きをよく見てくれたあとの、この時間だけは、珍しく長々と喋ってくれるのだ。

見事だという一言は、口下手な師匠の最大限の誉め言葉で、滅多に出て来ない。

言われたのが嬉しくて、つい吊り上がってしまう口の端を見られたくなくて、俯いた。

「ルグナ。お前もよくやった。精神感応力で相手の動きを読むのは見事だった」

「ありがとうございます！しかし、ハヤには通じませんでした！」

「そうだな。多少動きを読まれても、それを上回る速さで動かれたために、対処できなくなつたろう？特にハヤは、徐々に身体能力を強化していた。だからお前には、どこまで動きが上がるのか、速度の上限がわからなかった。それに、攻撃を受けた衝撃で心を読めなくなつた。それも隙だ」

「仰る通りです！反省します！」

なんでお前は脇腹殴られたばかりなのにピカピカに元気なんだ、と白い目になった。

だけど師匠が言うように、どこまで速くなるのかわからない敵というのは、厄介だ。

なまじ心が読めれば読めない速さに不安になり、不安は毒になる。

毒は、動きを鈍らせる。

わざと力を隠しているとかではなく、単に大して深くもない底を隠して罠に嵌めたかっただけだ。それに、持続的にあれだけの身体能力強化をできる技量もない。

今回のルグナは自分と同じほどの身体能力だったからかかってくれたが、師匠相手となると、今やったやり方は、あまりどころかまったく意味がない。

最初から全力で身体能力を強化していても小細工ごと真正面から押し切られてぶっ飛ばされるとか、本当に人間なのかこの人。

「……相変わらず刀を握ったら強いわね、アナタ」

砂だらけの体を拭うための布を渡してきながらのホノメの一言に、自分の動きが一瞬止まる。

「他に取り柄がないからな」

返せた答えは、それだけ。

確かに自分は、刀を握らせてもらえたならば、人相手ならば、強い。そのための技を叩き込まれたからだ。

だけど、化物相手にはどうなのだろう。

自分は魔力を体の外へ出せない。才能がなく、つまりは体質の問題だと言われた。

人に空を飛ぶための鳥の羽が生えていないように、自分はそのための機能を持っていない。【魔力持ち】であるのに。

身体能力を上げるにしたって、限界がある。

いくら体を強くしたところで、人間の拳で龍の鱗を殴ってもどうにもならない。人間の皮膚が弾けるだけだ。魔族にしたって同じ。

どう足掻こうが魔力を体の外へ出せない自分は、ドラゴンに選ばれるのだろうか。

選ばれたとして、普通に戦えるのか。

師匠のように——ホノメのように。

湿った布をきつく掴んだ。

「そうやって俯いてるから、選ばれないの」

つん、と額を指で突かれた。

かなり勢いがある一撃に、数歩後ろによろける。

「どうして剣を盗ったあとに顔を下げなくて、ルグナに勝ったあとに俯くのかしら。勝ったんだから凶々しく前を向いてなさい」

「……あんたみたいに振る舞ってろって？それから、別に俺は盗ってない。返すつもりだった」

「無断で持ち出したんだから変わらないわ。それで、どういう意味かしら。私が高飛車とでも言いたいのか？」

「……」

「こつちを見なさい」

追及してくるホノメの視線を、そっぽを向くことでやり過ぐして、布で顔を拭いた。

体の痛みはもう、かなり引いていた。

だが師匠の言うように、戦い終わった直後は激痛のせいで短い時間とはいえ動けなくなったのだ。

それをどうにかするには……どうすればいいのだろうか。

腰の刀の重みを感じながら、尚もつつかかってくるホノメをひよいひよい避けていると、師匠が手をぱんと叩いた。

「そこまで元気があんならば、課題だ。ハヤ、ルグナ。麓まで走れ。ホ

ノメはアメノに乗って狙い撃ちの練習だ」

「あの師匠、まさか？」

「俺から言うことはただ一つ。ホノメは麓に着くまでに撃ち抜け。ハヤとルグナは麓につくまで足を止めるな。以上だ。……俺とコクヨウは少し出てくる。帰りは夜になるから、先に休んでおけ」

さらりと告げられた課題に凍る。

アメノとは、ホノメと契約した龍だ。名前の響きが乗り手と似ている、藤色の鱗を持つ若い雌のドラゴン。

名を呼ばれたのが聞こえたのか、あまりこちらに興味なさげに伏せていたアメノが、尾をぴんと持ち上げるのが見えた。

コクヨウが頭をもたげ、まるで何か話しかけるようにアメノの方を見る。

ぐるぐる、とアメノが喉を鳴らしてこつちを見た。やめる楽しそうにこつちを見るな、喉を鳴らすな特大のお猫様かお前は、と胸の内を呟く。

ホノメに課された課題は、麓につく前に狙い撃て。

俺とルグナに課された課題は、麓まで辿り着け。

正反対に聞こえる課題の正体は、単純極まりないのだ。

アメノの背に乗り、魔力で狙撃してくるホノメの攻撃を躲しながら、山の麓まで逃げ切れということだ。

尚、ここから山の麓までは並みの人間ならば歩いて三時間はかかる。整備された道はなく、あるのは獣道のみ。途中には岩場もあり、罨もある。

そして、逃げる側が最後まで辿り着けた場合、狙う側にはコクヨウに乗った師匠に追われるという課題があとで与えられるため、追うほうも逃げるほうも必死になる鬼ごっこである。

赤い目をぎらつかせる黒龍の背に乗った、無表情な青年が狙撃して来るのだ。なまじ師匠の顔が綺麗な分、夢に出そうな怖さがある。

俺だって、師匠に追いかけるのは絶対に嫌だし、ホノメだっていくら尊敬する師匠の稽古とはいえ怖いものは怖い。

幸いなのは、アメノは一切攻撃してこないことくらいだ。

狙ってくるのはあくまでホノメで、彼女にとっては魔力による狙撃精度を高めるための訓練なのだから。

だが今まで、自分が麓まで逃げ切れたことはない。

最初は避けられても、麓のギリギリ手前で、いつも直撃して敗北してしまうのだ。

それを、今回は二人でやれと仰る。

何がなんだか、まだあまりわかっていなさそうなルグナの肩を叩いた。

「ルグナ、お前弓は使えるか?」

「一通りは使えるぞ。だが今は持っていない。それに、今のはどういうことだ?」

「弓なら貸すから問題ない。訓練だつて言われたら。ホノメに撃ち抜かれりや負けの鬼ごっこだよ。……師匠、弓って使つて良いのですよね?」

「反撃は存分にやっつていい。退け時を間違うなよ」

では各自励め、ひとまず解散、と師匠はまた手を叩いてコクヨウの方へ向かつて行つた。

あとに残つたホノメは、薄紫の瞳を光らせて獰猛に微笑んだ。

「ねえ、ハヤ。反撃していいかつて尋ねたつてことは、するつもりなの? いつも私に負けてるのに」

「いつも負けてるからつて、今日勝てないつて決まったわけじゃねえだろ、ホノメ」

「言つてなさい。今日も撃ち抜いてやるわよ」

がるる、と角付き合う自分とホノメの間に挟まれるルグナは、ひたすらに困惑気味だ。

だけど逃さないとばかりに、自分はその肩を掴んで、武器庫へとルグナを引きずつて行つたのだつた。

## その五

人が一人増えたからといって上手くいくわけもなく、今日も今日とて、自分は途中で打ち抜かれて地に倒れることとなった。

だけれど、今日組んだ即席の連携にしては上手くいったと思う。何も得られるものがなかったのではない。

そう思いつつ、自分は道を逆に辿ってルグナを探していた。こつちを仕留めたホノメとアメノは、先に家へと帰っている。

途中で俺を庇ったばかりに派手に吹っ飛ばされ脱落となつてしまったルグナは、慣れない土地の慣れない山な上に疲労困憊で動けないかもしいれないから、迎えに行かなければ、ということになったのだ。

いつもならば、自力で帰って来るまで迎えになど行かない。

ルグナのことは好きでも嫌いでもないが、自分を庇ってくれたせいでどんどんがらと派手にすっ飛んで気絶した人間を放っておくことはできなかつた。土道に反する。

別れたところまで戻って探してみれば、黒髪金目のよくわからんやつは、草地でぐうぐう寝ていた。

この状況でぐうぐう寝られるのかよ、と呆れながらその額を指で弾いた。

ピシ、と割といい音がし、すぐにルグナは目を開ける。目の前で手をひらひら振ってやると、すぐにがばりと起き上がってきた。

迎えをありがとう、というから、気にするな、と返す。こちらとしては、気にされては困るのだ。

「いつもこういう鍛錬をしているのか?」

「いつも。師匠がいたら変わるときもあるけど、あの人は忙しいから。あとはホノメと組手してる」

こつちがホノメに対人戦を、ホノメがこつちに対龍戦の稽古をつけ



ているようなものだ。自分に、ドラゴンと戦う予定はないはずなんだが。

何にせよ、ドのつくほど人が寄り付かない山の中でやることなど、他にない。

「喋れんなら歩けるだろ。早く立て。帰るぞ」

「いや喋れるから歩けるといふ論理はおかしくないか」

「おかしくねえわ。足痛えってんなら肩なら貸すからほら、行くぞ」

「案ずるな、普通に立てる」

そこまで口が回るなら草地で寝こけてないで自力で帰ってこいよと言いたくなかったが、やめた。

ルグナの屈託なさを見てみると、やる気がなくなったからだ。

「つうか、お前普通の音で喋れるんじゃねえか。なんでさつきまで声でかかったんだよ」

「緊張していたからだ！最強と言われている【黒】を前にしていたんだぞ！緊張の一つもするだろうー！」

「音量を元に戻すんじゃねえ。山の鳥獣が起きたらどうすんだ」

道なき道とまでは行かないが、細い獣道を登りながら、そんなことを話す。

自分は、故郷で狩りをしてきたから夜目は利くほうである。それにここは、家からも近い。謂わば近所だ。

ルグナはどうかなのかと思っていたが、こちらも普通についてきた。「なあハヤ、さつききの剣技はこのものだ？北の大陸と言っていたが、君はその出身なのか？」

「なわけねえよ。北の魔大陸に、人間なんてもう誰も残っちゃいねえだろ。【混沌】に喰われてさ」

さり気なくこちらの呼び方まで変わったルグナは、しかしまったく食い下がらなかつた。

何故どうしてどうやって、と引き下がる気が欠片もないらしい。凶々しいとは思うのだが、かと言って不快感を与えないのは才能だと思つた。

「……俺の生まれたところが、北大陸からの避難民が開いた里だった

んだよ。刀も刀術もそのモンだ」

もう手短かに話すことにした。

表でみだりに話すべきことではないと言われているが、師匠の弟子になるといふなら話しても構わないだろう。

だとするとルグナは弟子ということになるのか、という事実が今更迫ってくる。

「里があつたのか？俺は聞いたことがないが……」

「長あいこと隠れ住んでたんだよ。魔族の正体がわかってない時代に北の大陸から来た人間つてばれたら、まずいことになるだろ」

「迫害、か？」

「まあな」

目にぶつかる位置にあつた枝を避け、足元にあつた石で靴が滑らないように避けながら返した。

何せ五百年近く前のことだから、自分は当時を知らない。

だが、渡つて来た当初はそれ相応に生命の危険にも晒されていたと伝わっている。

でなければ里が丸ごと隠れ住むことも、子どもたちが外に出てはならないと戒められながら育つことも——あの土地を治めていた人間によつて、里の外へ出ることを厳しく禁じられることもなかった。

何のために使うのかも定かでない人を斬るための武術を習い、技術を残し、記録を子孫に伝え、日々の糧を得て、閉じられたままに巡り続けるだけの世界。

転輪しながら死に行くようなその円環を、横合いから体当りしてぶち壊したのは言うまでもない、あの師匠である。

あの日のことは、今でも覚えている。

何があつたのか、ひとつ残らず。

「龍に乗って飛んできて、里のど真ん中に降りてきて、ここにある武術を教えてくれないか、と来たもんだ。魔族……魔将が俺たちの里にある武器と同じモンを使つてたからだとき」

魔将は、魔族の中で特に力があり、理性のある厄介な存在とされて

いる。今確認されているのは一体だけだが、二体目三体目がないとは限らない。

理性のない怪物相手に戦って来たドラゴン乗りにとって、人と変わらない姿で見たこともない武器を使う魔将は強敵だった。

強敵という言葉では飽き足らない。

五十年ほど前の戦いで、ドラゴン乗りたちの多くを屠ったのが魔将であり、そいつは刀と刀術を使っていた。

予想が外れていなければ、ルグナの親父殿の片腕を奪ったのもそいつだ。

その刀使いの魔将がもう一度戦場に現れたときのために、師匠は戦術を探して、あの場所に辿り着いたのだ。

「隠れ里だったのだろうか？どうやったのだ？」

「あー……俺らの里を隠してた国の、長のところに直接乗り込んだらしいぜ。魔将が使ってた刃物の造りからして、高度な鍛冶技術がなきゃ作れない代物。だから、そういう高度な技術を持つてる国を片っ端から探したんだと」

探すと言っても、師匠は自分のドラゴン同伴で探したのだ。文字通りに、大陸を飛び回って。

これこれこういう武術と武器を持つような人々たちがいないかと、龍と共にある人間に尋ねられるのだ。

十中八九、口を割る。

師匠当人に脅迫の気がなく、真摯に真面目に真正面から尋ねるほどに、もしやこれは脅されているのではないかと相手は思うだろう。師匠の口下手と無表情と天人のように綺麗な顔も、絶対に拍車をかけたと思う。美人の真顔は怖いと、昔から相場は決まっている。

そして後ろ暗い人間ほど、そうやって勝手に追い詰められて口を割りやすくなるのだ。

「鍛冶技術……その刀か。だが、師匠は何故そうも北大陸の人間がどこかにいると思ったんだ？北大陸の生き物は、すべて死に絶えたという話だったのでは？」

「師匠もそう思ってたんだけど、師匠の友達が言ったんだと。大陸一

つが滅びるのに、誰も生き残っていないのはありえない。必ず誰かが抗って、逃げて、生き延びているはずだ、つてな」

【混沌】なんていう埒外の化物に喰われたのならば、誰も生き残ってはいないだろうという絶望的な意見が定説だった時代だったのに、その人はそう言い切り、仲間を巻き込んで調べた。

人間一人を犠牲にし、その底力で自分たちはこの世界を守って生き残ったのだ。

ならば、あちらの大陸で一人の人間も抗えなかったとは思えない。生き残れなかったなどは考えられない、と。

かなりとんでもない理屈に則り調べた結果、生き残りは本当にいた。

ふむふむ、としきりに納得したように頷いているルグナだが、多分その人はお前の御母堂だぞと、内心呟いた。

だが、こうやって尋ねて来るということは、こいつは自分の母と父のことを知らないのだろうか、とも思う。

「君の刀に使われている鋼の技術は、素晴らしいからな。為政者から見ればほしいものだったのだろう。……それを独占するために、君たちの里を隠していた、というところか」

「お前の察しが速すぎて怖い」  
だけど、そういうことなのだ。

製鉄と、その他北大陸特有の技術を持っていたから、自分たちの先祖は生き延びられて、そこからあとはずると隠れ里のままにされた。

魔族の発生原因は、赤の巫女が明らかにするまで不明だった。不明だからこそ、北大陸の住民全員に魔の素養があるとまで考えられたのだ。

ある日突然に、普通に暮らしていた人間の皮膚がめりめりと割け内側から肉が弾け、魔族になるかもしれないと。

魔族だとして、前触れなく北大陸から襲来した。

なら、その大地から来た生き残りが前触れなく変質することもあるかもしれない、と。それこそ病のように。

ドラゴンと、ドラゴン乗りたちですらそう思っていたのだ。

南大陸の人間社会に、北大陸からの難民を解き放つことはできなかった。

恐れながらも、御先祖様の持つ知識とそこから生まれる富を手放さなかったあの国の長殿、どれだけ面の皮が厚かったのだろう。

いくらドラゴン乗りが戦いに駆り出されてばかりの戦闘集団とはいえ、彼らの目から何百年単位で隠していたとか、かなり優秀だと思う。

その強欲さと先祖たちの狸爺ぶりのお陰で、こちらは細々生き延びられたとも言えるが。

そうやって隠されていた自分たちは、しかし【赤】の人が【混沌】の姿と魔族の真実を全世界に同時に知らせ、【黄金】がそれを肯定したことで、外に出られることとなった。

「だから君は里から出て、師匠の弟子になった、と?」

「そういうこと。爺婆は里から出てないけどな。他にも何人か出てるはずだ。だけど自分からは北大陸の生き残りの子孫だなんて言わねえよ。不気味がられんのは癪だからな」

枝を透かした向こう側に、揺れている家の灯りが見えた。

だからこれで話は終わり、とそう言おうとしたときだ。

「だが、君はその歳でよくあれだけの刀術を身に着けられたな。長年隠されて来た里というならば、為政者は武を学ぶことを望まなかったのではないだろうか」

問い詰めるでもなんでもない、ただ心に浮かんだことを尋ねただけというその声に足が止まりかけ、止まらないままに答えた。

「俺の家は、そういうことをするための家だったからな。少しくらいの無理は押し通してでもやるさ」

「どうい……」

「お喋りは終わりだ。ほら、着いたぞ」

数時間前に飛び出した平屋。

師匠の家がそこにあった。家の横には、番をするために、丘のように丸まった姿の紫の龍がいる。

こつちを見ると、アメノは牙が生えそろった口を少し開けてニヤリと笑う。

龍の友好的な微笑みは、多少の悪人面など目ではないほどに凶悪なのだ。二年も見ていれば、もう慣れたが。

「あら、帰ったのね。思っていたより速かったわ」

両刃の剣を腰に吊ったままの姿で戸を開けたのは、ホノメだった。

日はもう沈んでいて、飯時なのである。

大食いのドラゴン乗りの家では食事は非常に重要で、料理の腕は上から順に自分、ホノメ、師匠だ。

ホノメは、笑顔のまま家の裏手を指さした。

「家に入る前に湯を浴びて来なさい。土塗れで入って師匠の家を汚さないで」

「誰のせいでこつちが泥まみれになったと思ってるんだよ」

「私のせいね。それがどうかしたのかしら？」

避けられなかったほうが駄目なのよ、と藤色の瞳を猫のように細めてころころ笑うホノメはかわいいが、ちよつと腹が立つ。だけどかわいいのだ。

はあ、と息を吐いて頭をかいた。

「わかった！こつちだな！」

「違うわ阿呆！逆だ逆！」

何をどう緊張したのか知らないが、いきなり大声を出したルグナの頭をしばき、自分は湯浴みの場へと引き摺って行ったのだった。

湯を浴びて、飯を食って片付けて机に向かって学べば、それで一日

は終わる。

空いている部屋に布団を敷けば、それで寝床になるのだ。そも、この家には寝台というものがない。

あの隠れ里では、寝台を使って寝ることがなかった。

綿入りの布団を床の上に直に敷いて寝床としていたのだ。南大陸の多くの国と異なるその習慣は、そっくりそのままこの家にもある。

寝台派より野宿派だという論外師匠は、寝床さえあるなら、台でも布でも気にしないという人だ。

お前たちが寝やすいようにやればいいと言ってくれたから、自然そうなった。

この家は師匠の家なのだ。なのに、食べ物や習慣などはこちらが持ち込んだあの里のものが多くある。

それだけあの人が、ものに頓着しない面があるという表れだ。

「おやすみなさい。明日はアナタが朝食当番よ、ハヤ」

「忘れてねえよ。食いたいもんあるか？」

「塩味の焼いた肉。あと、野菜」

「了解」

塩漬け肉の残りはあつたらうか、と考えながらホノメとは別れる。

ホノメの部屋は、自分が使っている下手の丁度反対側にある。口の字型の建物の一角目が玄関として、玄関を背にして建物の中を向いたとき、右手に俺や師匠の部屋、左手側にホノメの部屋があるのだ。

部屋数の割に、この屋敷に住んでいる人間は少ない。

多くの弟子が暮らせるようにとつくられた家であるのに、師匠が、自分は人にものを教えるのに向いていないからと、自分たち以外の弟子を取っていなかったからだ。

そもこの屋敷は、【五翼将】が宿無しでは外聞が悪すぎると、どこから押し付けるようにして贈られたものらしい。

師匠本人は、どこでも寝られると構えている渡り鳥のような人なのだ。コクヨウも、土地に執着はないらしい。

だからこの屋敷には、出入りする人間が少ない。留まる人間はもつと少ない。

だけど今日、ルグナが加わった。とはいえこいつは、親が親だ。くあ、と欠伸をしながらルグナを部屋まで案内する。案内しながらふと、気になったことを口に出した。

「ルグナ、お前、飯は作れんのか？」

「一通りはできるが……兄上からは不評だぞ？俺が作るものは味が濃くて健康に悪いと言われていたからな」

「不味いって言われてねえなら大丈夫だろ」

料理の失敗なら、自分もホノメもやらかしている。

師匠も若いころは色々やったというから、怒ったりしないだろう。

ただし、失敗してどれだけの暗黒物質が出来上がるうとも、自分でこしらえたものは何が何でも食べきらなければならぬが。

「君たちは、受け入れるのが早いな」

「あ？」

部屋のともし火を消そうという段になって、ルグナはそんなことを言い出した。

床の上に並べた布団は二つ。

これまで自分ひとりで使っていた私室にルグナの分を置いた格好になるのだが、自分は特になんとも思わなかった。

私室とは言えど、自分に私物というのはほぼない。

大切な私物は、刀と剣と、その手入れ道具ぐらいなのだ。衣は師匠の分を仕立て直せばいいから、買うようなこともない。

ルグナにしても似たようなものなのか、私物は剣と着替えの衣くらいだった。

元々この屋敷の者は全員、物が少ないのだ。

書物だけは知識のためにと豊富にあるが、書庫にあるから個人の部屋には置かない。

【黒】の人は、弟子をめつたに取らないし、なかなか他人を懐に入れないと聞いていたのだ。だが……」

「そういうわけでもねえよ。師匠はちよつとこう、生き方の音頭が独特なだけだ。基本は懐っこいぞ、あの人」

怒ると烈火のように恐ろしいが、理不尽なことは、決して言い出さ



ない。

同時に、そういう人の大事なものを勝手に持ち出した己を顧みる。ともし火を消し、暗くなった部屋に敷いた布団の上へ倒れ込む。

やわらかい綿入れの布の底へ、煎餅のように平たくなって沈み込みそうになった。

焼けつくような後悔をするなら、ああ、最初からやらなければよかったのだ。

本当に自分は、無様極まりない。

眼を閉じると、見えるはずもない幻が瞼の裏に映る気がした。

鮮やかな赤い髪と赤い瞳をしていた俺たちの姉弟子、五十年前も前、世界のためにいのちも魂も捧げたという師匠の相棒。

どんな人だったのだろう。

どんなふうにあの剣を使い、戦っていたのだろう。

そんな疑問が、胸を掠めた。

食堂の親父は、香辛料まみれの煮込み料理が好きをやつだったと笑っていた。

あの親父が若かったころに、姉弟子は確かに、生きていたのだ。

生きて、親父の料理を食って戦って、そしてある日、二度とは帰ってこなかったのだ。

超然とした【赤】の巫女としてしか思い浮かばなかった人の姿と、その人が遺した剣を今でも持っている師匠の姿が迫って来て、自分はどう伏せになって枕に顔を埋めた。

「どうした？」

「……ほっとけ」

もつとちやんと、師匠と話をしよう。話を聞こう。請いて、知らなければならぬ。

ルグナのような魔力操作もろくにできなくて、ホノメに抜かされてばかりの自分だ。

無様も無様だけれど、だからこそ退けなかった。

「俺にはよくわからないが、今日一日話してみた君は、善い人間だと思う！明日は明日の風が吹くのだ！今日はもう寝よう！」

「うつせえんだよバカタレ。ホノメが起きたらどうすんだコラ」  
やたら勘のいいやつ顔の顔面目がけ、枕をぶん投げたときだ。

近づいてくる親しんだ気配があった。周りが静かな分、その気配はわかりやすい。

ルグナも察したのか、枕をくらって倒れた体を即座に起こす。

「師匠か？」

「ああ。帰って来たんだろ。ちよつと出て来る」

「俺も行くぞ」

好きにしろ、と言いつつ寝間着のまま部屋の外へと出てみれば、ホノメも気がついたのか上着を羽織って出てきていた。

眠るところだったのか、髪飾りは外している。

「師匠かしら」

「そうだろ、この感じは。コクヨウの気配もあるし」

「うん、俺もそう思う」

踏むと微かに軋む、冷たい板張りの廊下を三人で進み、玄関の戸を開ける。

開けたそこには、外套を羽織って佇む師匠の姿があった。その後ろには、巨体を揺らして歩いて行くコクヨウの姿。

師匠には、気配でこちらが起きて玄関に雁首並べていたことはわかっていただろう。少し眉が下がっている。

師匠の腰には言うまでもなく、あの赤い剣が下がっていた。

「起こしてしまったか？」

「私たちは寝るところでした。師匠の気配で起きたわけではありませんせん。……おかえりなさい」

「そういうことです。おかえりなさい、師匠」

さっさと外套を取り、ホノメが答えた。

目配せされて気づく。師匠は、どうやら疲れているらしかった。体が、というより心のほうだ。

いつもは、遥か高みにいる強くてわかりづらい人だけれど、時々分厚い雲の隙間から顔を出す日のように、素の表情が現れるときがある。

今晚は、そういう日であるらしかった。こりやよほど何かがあったらしいと、あたりをつける。

となると、やることは大体決まっていた。

師匠はホノメに任せて、自分にはやるべきことがある。

「ルグナ、こつち来い」

「ん？」

「この家で暮らすやり方の一個を教えるから、ちよつとこつち来い。厨だ」

事情などさっぱりわかっていないだろうに、妙に鋭い新たな住人は、うむ！と大きく頷いたのだった。

## その六

師匠が疲れて帰ってきたとき、俺たち弟子がやることは決まってる。

熱い薬草茶を淹れ、蜂蜜を垂らして出す。

それだけだ。

それだけなのだが、薬草茶は温度やら分量やらを間違うと鼻の奥に突き刺さる酷いえぐみが出てしまうため、美味しく淹れるには少しばかりコツがいる。

そのコツをなるたけ迅速にルグナへ伝えながら茶を淹れて戻れば、師匠とホノメは居間に座っていた。

板張りの床の上に分厚い布を敷き、丸い座布団を置いてそこに座る習慣は、師匠の故郷の習慣だ。

だけど、蜂蜜入りの薬草茶はあの里から持って来たものだ。

異なる地方の、異なる習慣が混ぜ込めになった暮らしが営まれているこの家では、別に珍しいことでもないのだが。

「師匠、茶です。熱いし濃いから気をつけてくださいよ」

「……ああ。ありがとう」

ホノメが軽く片目を瞑ってきたので、同じ仕草で返す。

普段こちらにきついホノメでも、師匠に何かあれば協力し合うのは暗黙の了解だ。

ずず、と湯呑を両手で持って茶を飲むと、師匠の雰囲気はかなりいつにも戻った。

「何か、あつたんですか？」

「あつたと言えばあつたが、大したことではない。お前たちは早く寝ろ。明日からまた、外へ出る。……茶は、助かった」

はいはい、と立ち上がりかける。

「待て。ハヤだけ残れ。話すことがある。ホノメとルグナは寝てい

い

昨日の今日で自分だけが残されるとすれば、言うまでもない。剣を勝手に持ち出したことに関して、以外にはないだろう。

来るべきものが来たとしか思えなかった辺り、自分はやはりひねくれていると思う。

ホノメは軽く頷き、何か口を開きかけたルグナを無言で促して、去って行った。

ホノメは自分のことを好いてなどいないだろうが、昔自分のことを救ってくれた師匠のことは一途に想っていて、言うことには従順だ。

師匠と俺だけが部屋に残される。

師匠が持つ湯飲みから、白い湯気が螺旋を描いて立ち上っているのが、やけによく見えた。

「……お前が剣を持って出たのは、俺が、ドラゴン乗りならばこの剣を抜ける、と言ったからだろう」

いつもの如く、師匠には前置きというものが一切なかった。

「ドラゴン乗りならば抜ける、というのは、正確な言い方ではなかった。これを抜けるのは、魔力を体外で操れる人間のみだ」

だから、剣を抜ける者は、ドラゴン乗りでなくてもいる。きつと、いくらでも。

膝の上に置いている剣を、師匠は音も立てずに抜いた。根元から切っ先まで、その剣は淡い紅色に染まっている。

ゆら、と波立つように紅色の刃紋が揺れた。そんな気がする。その揺らめきの向こうで、何か光ったようにも見えた。

「体外に魔力を放出する才能は、生まれつきだ。が、ごく……ごく稀に、瀕死になるほどの衝撃を受けて籬が外れるときがある。お前は、それを狙って大会に出たんだろう。最終戦では、俺ではないドラゴン乗りと、戦うことができるから」

「そこまで知ってるんだったら、聞く必要なんかありませんよね」

薄暗い部屋の中でも消えない光を放つ剣と、それを手にする師匠の風いだ瞳を直視できなくて、目を逸らす。言葉も刺々しくなった。

師匠の言うことは、一から十までその通りだった。

「お前がドラゴン乗りになりたい理由は、なんだ？」  
俺が目を逸らしても、逸らさなくても師匠は話すのをやめなかつた。

やめては、くれなかつた。

静かなその声に、自分の最初の記憶が引きずり出される。

あの子の笑顔と、繋いだ手と……血を吐くような、慟哭が。

噛み締めた唇から、血の味が滲む。

あの光景が、自分の始まりにあるのだ。

「籠が外れるというのは、本来必要ない生命の境界を踏み越え、触れられなかったものに触れることができただけだ。触れて、戻って来られる保証もない。まして、龍の宝を持ち出したりなぞ二度とするな。あいつらは情が深い分だけ、己のものに対する執着が強い。特にコクヨウは、最初の乗り手に今も拘り続けている」

師匠は剣を鞘に戻し、傍らに置く。

はい、と答える声は、自分のものではないかのように掠れていた。

「師匠」

ぐ、と喉が鳴るのを押さえながら声を絞り出した。

「…………ごめんなさい」

返事代わりか、とん、と師匠の指が額を突いた。

「二度とするなよ。……お前が戦おうと思つた理由を、忘れるな。方法を間違うな。目的を見失つた人間には、決してなるな」

この話はもうこれきりにする、と師匠は湯飲みを手に持った。

一口啜り、肩をすくめる。

「師匠。……その剣の話、聞いてもいいですか？」

立ち上がるうとしてか、膝を崩しかけていた師匠に、自分は尋ねていた。

一瞬、虚を突かれたような顔になった師匠だが、何事もなかつたかのように、元の通りに座り直してくれた。

「……元々、これは普通の剣だった。五十年前に、魔力を大量に浴びて鞘諸共素材の魔鋼が変化しただけだ。魔剣なんぞと言うやつもいるが、ただ、それだけの武器だ。切れ味は良いがな」

五十年前から使われ続けているだけで、相当な業物だと思うのだが、師匠にとつてはただの武器で……形見の品なのだろう。

「結晶化、の亜種なんだろうな、この色変わりには。唯一珍しい特徴と言えば、魔力を持つて握らなければ、剣が鞘から離れないことか。原理は俺にはわからないのだが、少々特殊な癒着状態にある。素材は……なんだったかな、西山地の魔鋼山から取れたという話だったと思うが……すまん、五十年以上前のことだから、細かいことは忘れた」

しまった、と思った。これは完全に額面通りに受け取られている。剣の話を知りたいと言ったから、師匠はこのままだと延々剣の話しか語らない。型番の名前とか、自分にはどうでもいいのだ。

本当に聞きたいのは剣じゃなく、それを使っていた人の話なのに。「あの、師匠。ほんとすいませんごめんなさい。間違えました。俺が知りたかったのは、その剣を使ってた……ジザさんの話です」  
「なんだ、そっちなか。珍しいな。お前が俺の昔の話を知りたがるなんて」

師匠に悪気は一切ないのだが、だからこそこちらのこれまでの無関心ぶりを指摘されたようだった。

茶を一口啜ってから、師匠は続けた。

「ジザはあだ名で、本当の名前はアジザだった。俺の四つ下で、長いからそう呼んでいいと俺たちはあいつに言われてな」

「俺、たち、って……」

「俺と、シャクラにフェイだ。その二人はお前も知ってるだろう。ルグナの父母だ。あいつらと俺たちは、四人と三頭の一組で戦っていた。前に出て戦うドラゴン乗り三人と、司令塔役のフェイ。俺の龍だったシランと、ジザの契約龍のコクヨウ、シャクラと契約した龍、エラワーンだ」

ドラゴン乗り三人に、ドラゴン三頭。それに【魔力持ち】。

今の時代ならば、それだけできつと街や村ならば時間は多少かかっても攻め落とせる。

そんな師匠たちですら、あの時代においては五翼将でも何でもない一兵卒で、死なずに戦い続けることが精一杯だった。

「ジザさんは、俺たちの姉弟子だったんですね」

「ああ、そうだな。俺とジザには師匠がいた。師匠が死んでからは、俺があいつの修行も見ていたから……あいつは、後輩でもあったし弟子の一人でもあった。ジザから俺は、先輩と呼ばれていたな」

「先輩？」

「それより前は、兄弟子と呼ばれていた。師匠が死んでからは先輩、だ」

自分の契約龍とにかく甘いやつだった、と師匠は語る。

紫の瞳が、静かに地上を見る細い月のように細められていた。

「コクヨウは元々、ジザの龍で、俺の龍はシランと言った」

「……そのドラゴンは、どうしたんですか？」

乗り手が入れ替わることはあっても、騎乗龍が入れ替わることはほとんどないとされている。

単純に、人間は龍より弱いからだ。精神も、体も。

師匠はああ、と頷いた。

「シランは、死んだ。……龍の心臓に、莫大な魔力が蓄積されているのは、お前も知っているだろう。ジザはシランの心臓の魔力を解き放つて、あの結界を張った。シランを起爆剤に、自分を回路にして、結界を編んだんだ」

龍の心臓の魔力濃度は、凄まじい。

仮に間近で浴びたならば、人間など一瞬で細胞が汚染されて結晶化する。

【魔力持ち】やドラゴン乗りでない並みの人間ならば、即死しているのだ。

「この剣は、シランの心臓を突いた剣だ。爆心地とも言える場所にあったから、こうして刀身の色が変わってしまったんだ」

「なんで、赤くなつたんですか？」

姉弟子だった人のかつての名は【黒】。師匠は【蒼】だった。ならば、

【赤】はどこから来たのだ。

「さあな。だが、コクヨウの瞳は赤で、ジザが放つ魔力は赤だった。俺も、昔は蒼で今は紫だ。契約龍により変化するんだろう」



知っている。

師匠が放つ魔力は、紫色を帯びている。滅多に見たことはないが、綺麗な色なのだ。

「とはいえ、あいつの最期のことなんて、この世界の皆は知っているだろう。……知らない話と言うなら、何があつたらうかな」

知っている話など、今更語る必要なんてないだろう、と師匠は遠く、窓の外を見た。

風でかたかたと鳴る硝子の向こうは、ひたひたと迫る夜闇に満たされていた。

「ジザの好きなものはあのカレーという料理と、それに小さな猫と犬だった。だけど、俺たちはほぼ龍舎に住んでいたからな。髪にも体にもあちこちドラゴンのおいが染みつき過ぎて、な」

「……それは、絶対怖がられますよね」

「正解だ。近寄ってももらえないから、遠くから眺めていたな。食糧庫では、鼠取りのために猫を飼うだろう？ 厩には犬もいて、だが馬にも犬にも怯えられないように、やはり遠くから見ている」

先輩の、さらに四つ下だったジザ。

五十年前なら、今の自分と同じか一つ上程度だろう。

「嫌いなものは、ヤツミ草の汁だった。あれは切り傷に効く薬だが、なにせにおいがきついし染みると痛いだろう？ 一度、間違えて眼に入つたとかで大騒ぎするものだから、コクヨウまで騒いで大変だったんだ」

「……」

あの黒龍が慌てるという姿がまず、想像できない。

ドラゴンとその乗り手が騒ぐって、それはどういう災害だ。なのに、たかが染みる薬で大騒ぎ。

色々と情けない自分でも、さすがにやらない失敗だ。確かに、ヤツミ草の汁は染みるし痛い。

「それと……そういえば、あいつには前世の記憶があつてな。前は男だったと言っていた。異なる世界に異なる形で生きていて、転生したそうだ」

「はあ?」

転生、と鸚鵡返しに言ってしまう。しかも、男だと。

明らかにあり得ない、重要なことなのに、師匠にとっては、好きなものと嫌いなものの話の後に、ついでに思い出すような、些細なことではないらしかった。

「生き物の魂が転生するというのは、最近学術的にかなり明らかにされたが……あいつが、転生の自覚のある実例一例目なわけだ。二例目があるのかは知らないがな」

「だけど、転生したら記憶はなくなるはずなんじゃ……」

「毎日毎日、人も獣も多くが死ぬ。何百何千何万もの生命が、日々死んでは生まれるを繰り返すんだ。一つや二つ、他と違う何かを抱えたまま生まれてくるやつくらい、いるだろう」

中央部の学者が唱える【転生】と、それに関わる【魂】と【体】と【心】、そして魔力の関係は、複雑だ。

人も獣も、虫も魚も、植物も、この世界に生きているものは、【魂】を持つている。

【魂】が体に宿ることで、生物として動けるようになるのだ。

自分たちの体は、魔力という力がなければ動けない。人も獣も、鳥も魚も虫も、ありとあらゆる生き物がそうだ。

食物を摂取するのも、生きるための魔力を得るためである。

魔力は、体の細胞を結び付けるための力であり、日々心臓を動かすための力なのだ。

だからこそ、その生命そのものとすら言える力を、自分の意志で操ることのできる【魔力持ち】やドラゴン乗りは特別となる。

【魔力持ち】とはいうが、魔力そのものは体のある生き物ならば皆持つていて当然なのだ。

そして、【魂】はその魔力を体に留めるための楔とされている。

不可視で、莫大な量の力を秘めた高濃度の【力】の塊なのだ。

【魂】がないならば、生き物の体はただの細胞の塊だ。

意志が宿らないどころか、時間が経てば亡骸は生き物としての形を維持できなくなる。腐敗するのだ。

【魂】にある【力】が魔力と同質なのか、それとも異なる次元の力なのか、それはまだ説明されていない。

【魂】が体を離れることが生命の死で、体が壊れれば、【魂】は体との結合力を失う。

残った体は、当然、腐る。腐って分解されて、また新しい体の一部になる。

体を失った【魂】が、どのようにしてまた別の【体】に入るのか、これもまだ説明されていない。

それでも【転生】とは、体から離れた魂がまた別の体に入り、生きていくことになる。

だがそこに、転生前の記憶が残される余地はない。

記憶は、脳の細胞に蓄えられるもの。

脳とは詰まる所、体の一部でしかなく、それそのものに意志のない

【魂】に記憶が刻まれるわけではないのだ。

だとしたら、【心】はどうなるのだろうか。

「心は、魂と体の間に発生する現象、だったな。記憶を元に組み上げられる感情の形成と発露という一連の現象が、学術的な意味での心とされている」

「魂が離れた体は分解されて、で、また新しい体を作るんですよね？」

だから、同じ人間は二度と現れない。

魂はただの力の塊で、記憶はただ体の、脳の、細胞に刻まれた情報だから。

「そうだ。この世界で、魂と体はそうやって、永遠に巡っていく。きっと、この世界に満ちている力の量には、限界があるんだろうな」

師匠の視線が、剣に注がれる。

帰って来たときに纏っていた、あの重く怖い、濡れた布のような空気があった。

いや、怖いというのは少し違う。

そこにあるのは、ほかりと口を開いてこちらを見ているような、深淵に繋がる虚無だった。

腹に力を込めて、自分は問うた。

「師匠、やっぱり何か、あったんですよね？」

「いや、特には何もなかった。気にするな。……もう寝ろ」

嘘だ、と思った。

何もなかったはずはない。

自分は魔力をろくに扱えない人間だが、勘は鋭い。他に取り得がないと言えるほどに。

じつと見つめれば、師匠は黙り、軽く肩を落とした。

「師匠、俺は確かに馬鹿ですけど、でもあなたの弟子なんです」

心配しないなんてこと、あるわけないのだ。

この人がいなければ、自分たちなんぞろくな生き方ができない、という打算はあるにしても。

睨み合うこと数秒で、師匠は肩を落とした。

「……あの結界はな、魔力汚染で結晶になって砕け散ったあいつの……ジザの体でできている。だったら、魂は一体どこにあるんだろうかと、俺はずっと思っていたんだ」

体が壊れれば、魂はそこから離れる。

離れた魂はまた、新たな体に宿って、生まれて来る。

大切な人の【魂】が新たな生命を授かって生きているならば、慰められる心はある。

それが喩え、人間でなかったとしても。決して生まれ変われないで虚無を巡るよりは、余程いい。

「あいつの魂は……今もあそこにあるそうだ。薄く薄く広がって、結界の一部となっていると、最近の研究で明らかになった、らしい。それが今日、わかった」

結晶となって砕けた体は魔力で結ばれ、結界の膜となった。

だが、術者の意志がなければ、魔術は続かない。

【魂】と【体】が揃って生まれる意志がなければ、空中に漂う魔力を結界の形へと加工することができない。

なのにあの結界は、ずっと、ずっとずっと存在して、世界を守ってくれているのだ。

「あいつが死んで、【魂】がこの世を巡って、それで新しい生命として

生きていまいか、とずっと思っていたんだが」

——それは都合のいい、空想だったと、師匠は呟くように言った。

「仮初でも、今は平和だ。平和な世界で、人間として生きていてくれな  
いか、と、な。何も覚えてなくなつて、生きていてくれるならばと思っ  
たんだが」

「……」

魂が結界にまだあるならば、ジザという人は死んでいないし、死ね  
ていない。

【体】は結晶となつて結界に、【魂】は【体】が完全に崩壊しないた  
めの楔になつて、今もあそこにある。

しかし、到底人間と呼べる存在ではないのだ。そんな状態は。

だのに【魂】と【体】が揃っているのだから、生命としての死は、訪  
れていない。転生できるはずがない。

それならば。

「ジザの意志……【心】とは、どこにあるんだろうな」

湯飲みを手にとって、今度こそ師匠は立ち上がった。

剣を手に、こちらを振り返つた顔はもう、いつもの湖面そのもの  
だった。

ほんの短い時間垣間見えた、五十年前に取り残されたままの、知ら  
ない誰かはもう、そこにはいなかった。

「お前の守りたいものは、失われていない。だからお前は……そのま  
まであれ」

無鉄砲はもう少し、どうにかしてくれなければならないがな、と微  
かに笑いを含んだ声で師匠は言った。

自分には、何も言葉が出なかつた。

弟子なのに、何か言わなければならないのに、言葉が喉の奥で凍て  
ついて、何も言えなかつた。

俯いた自分の頭の上で、ふ、と師匠が表情を緩める気配があつた。

「早く、寝ろ。明日から任務だ。さつき言つただろ？」

ぴし、ともう一度指で額を弾かれる。

結構、痛かった。

「……師匠、痛いんですけど」

「当たり前だ。今度は痛くしたんだからな。……お前は、」  
迷うように、師匠の瞳が揺れてそれっきり静まる。

何かを言いかけ、しかしこの人はやめたのだ。

「また明日、だ。俺はコクヨウの様子をもう一度見て来るから。俺が戻る前に、寝室に帰っておけ」

それっきり、自分たちの師匠は外へと出ていき、床の板が踏まれて、軋む音が遠ざかっていった。

自分は一人座ったまま、その音を静かに聞いていた。

## その七

翌日、師匠は朝飯の粥を食べながらいきなり、この山から龍に乗って飛ぶと宣言した。

あまりにきつぱりした口調だったものだから、昨日の話の折りに見えた井戸の底のような暗さなど、欠片もなかったかのようだった。

「飛んで、どこへ行くんですか？」

「ヴェスタ山の麓の街までだ。そこに、魔族が出たという知らせが来た」

たちまち、朝食の席は凍りついた。

だってそれは、有り得ないはずだ。結界はまだ、あと五十年は保たれるはずなのだから。

一様に顔色を青褪めさせた弟子たちの顔色を読んだのか、師匠は食器を置いてかぶりを振った。

「落ち着け。まだ魔族と決まったわけではない」

「だけど、疑わしくはあるんですよね。でなければ、師匠が行くなんてことにならないでしょう？」

ホノメが問えば、やや苦い顔をしたまま、師匠は頷いた。

魔族に襲われたという事件自体は時折起こるのだが、それらの中身はただ尋常でない大きさの獣に動転しただけだったり、魔族と見せかけた、ただの野盗の仕業であるのだ。本物の魔族が現れたという話は、一度も聞いたことがなかった。

五十年前の魔族たちの恐怖は、まだ人々の間から拭い去られておらず、不安に駆られた人間たちが騒ぐことはあるが、龍たちの手を借りず国の手でどうにかなる程度の騒ぎなのだ。

だが、師匠のような【五翼将】にまで指令が来るといふことは、それは、本物の可能性が高い。

この大陸に再び魔族が現れるときは、この世界がもう一度滅亡の危機に晒され、最後の戦いが起こるときのみのはずなのに。

魔族と戦ったことがない自分たち三人でさえ、身構えるほどに。

「……結果が、破られたわけではない。破壊されたならわかるように、術式が加えられている」

そちらからの報告がないのに、現に魔族に襲われたと訴え出た町があつたというのだ。

「戦闘も予測される。お前たちも準備は整えろ」

ホノメ、ルグナ、俺の三人は揃って、はい、と答えた。

いつそ本物の野盗であつてくれればよいのだが、そうなればなつたでどのみち戦闘の可能性はある。

魔族相手になるなら、自分の対人特化の剣術がどこまで通じるのだろうか。

「俯いている暇はないと思うぞ！ 現に俺も、兄上からは生まれ持ったものを生かしたいなら、人を相手にする職を探せこの愚弟！ と尻を蹴っ飛ばされたが、そのまま家を出てきたからな」

常に元氣印のようなルグナだが、それなりに色々あつたらしい。尻を蹴飛ばした勢いで家出されたなら、蹴つたほうは堪つた者じゃないと思うのだが。

冷静と冷静と冷血が紙一重のところできりきり舞いしている、と以前師匠が漏らしたような人が兄貴で、何故こうもやかましい弟になつたのかは甚だ疑問であるが。

「お前はまだいいだろ。魔力を放出できるんだから」

確かにルグナの、先読みの域にまで達している読心能力は魔族相手には通じないだろう。

最悪、死体の思念を読み取って発狂しかねない。

だが、体内に巡らせるしかできない出来損ないよりはどれだけマシか。

龍の鞍の革紐を、知らず力を込めて引く。

苛々するのだ。あの子ができることができない自分に。できないことを認められない自分自身に。

「俺に勝った君がその有様だと、こちらも惨めになるのだがなあ」

「だーかーらー、勝手に心読むなっつってんだよ。もう一回ぶちのめ



すぞ、お前」

「いや、読んでいない！君がわかりやすいだけだ！」

「いい加減にしなさい愚弟ども。まとめて私に吹き飛ばされたいの？」

手は止めていなかったのだが、目を三角にしたホノメの周囲には魔力で起こした風が吹いていたので早々に口を閉じた。

ヴェスタ山の麓までは、ドラゴンに乗って行く。ドラゴン乗りでない自分とルグナは、コクヨウとアメノに乗せてもらうことになるのだ。

編成は、自分がアメノに、ルグナがコクヨウに乗るということになった。

「落ちるんじゃないわよ。落ちるまで助けないからね」

「落ちたら助けてくれるんだろ、それ」

言い返すと、普通に頭を叩かれる。

二人乗り用の鞍についている騎乗帯で体を固定すれば、それで準備完了なのだ。手間取るかと思つたルグナのほうも、普通に乗り込んでいた。

「あんた、あのルグナとすぐに仲良くなれたの？」

「……仲良いのか、あれ」

自分もルグナも、好き勝手なことを喋ってるようにしか思わないのだが。

そういうと、ホノメは呆れたように頭を振った。

「知らないわよ。でも連携はとれてたじゃない。狙い撃つのに苦労したものだ」

その判断基準はどうかと思うのだが、ホノメも自分も友人というものがいた覚えはない。誰の顔も、具体的に浮かばないのだ。

ピー、と師匠の指笛が響く。コクヨウが翼を広げ、今にも飛び上がろうとしていた。

砂塵除けの眼鏡をかけて、ホノメに領けば、彼女はアメノの首を手で叩く。薄い紫の翼が広げられ、龍の体が浮き上がる。

ふわり、と内臓が浮き上がるような心地になる。

「下見てると酔うわよ」

「……」

素っ気ないホノメの言葉を聞きながら、家はみるみるうちに足の下で小さくなって行った。

#####

ヴェスタ山の麓の街は、青色に見えた。

万年雪を頂く山の麓に造られた小さな街で、周りを木々に囲まれているのだが、建物の屋根が一様に明るい青に塗られているのだ。

街を囲む壁の外に広がる草地でドラゴンから降り、降りたところには既に街の人間が集っていた。

「お待ちしておりました。【黒】のレト様！」

この街の長なのか、恰幅の良さそうな男と、その秘書らしい痩せた女である。

待たせてすまない、と簡潔に言った師匠を見る彼らの眼には、はつきりと畏怖があった。背後に小山のような黒龍がいるのだから、それ

も当然だ。だが、相對している師匠は威圧しているつもりはほぼ無いに違いない。

さらに、多分出迎えた彼らの眼には、同じドラゴン乗りの弟子であるホノメくらいしか見えていないのだろう。

隣では、ルグナが眉をへの字にしていた。

「どうした？」

「……さすがに俺も、誰彼構わず心を覗いたりしないぞ。そういう人間と思われていたなら心外なのだが」

「眉間に皺が寄ってるから聞いたんだよ」

「む。それはすまない。……いや、なんというか、ここに本当に魔族が出たのだろうかと考えると、緊張したんだ」

「緊張しすぎると却って駄目よ」

弟子三人で言い合っているうちに、師匠と街長の話は終わったらしい。

読めない表情で戻って来て、戻って来るなりこう言った。

「ホノメ、ハヤ、ルグナ。今からしばらく、俺とは別行動だ。魔族が出たと言われた箇所が、街の各所に散っている。手分けして散策すべきだ。それから、人数分けだが……一人増える」

「はい？」

手分けして別行動、まではわかる。だが誰が増えるのかと聞くまでもなく、そいつは現れた。

「はいはい！私ですよー！」

えいやっ、というふざけたかけ声と共に上から跳び降りて来たのは、白髪の若い女だった。

着地したその手に握られているのは、先に鞘をつけた槍。

上を見れば、そこには枝を張り出した木がある。まさか、そこにいたのかこいつ。

咄嗟に何も言えない俺たちの前で、女は目をぱちぱちと瞬かせた。

「あれっ？通じませんでしたか？せっかく準備して隠れてたんですけどねえ。あ、お久しぶりです師匠」

「久しぶりだ、ヨミ。だが毎度毎度、お前は普通に出てくることができ

ないのか？」

「普通じゃあつまらないじゃないですか。でもこの子たち大丈夫なんですか？私が上にいたのに、気づけてないんですよ。上からグツサリしても、わからなかつたんじゃないですかねえ？」

雪のような艶のある白髪の女の瞳は、夜のように真っ黒だった。

表情は笑っているのに、目にまつたく笑みがないのだ。顔がなまじ人形のように整っているだけに、ちぐはぐさが無視できなかつた。

対する師匠は、いつものようにきつぱりとした口調で言う。

「それはない。殺そうとしても、ハヤは反応できたらう。ホノメは気づくのが遅かろうが魔力障壁で弾ける。ルグナは……根性で一撃では殺されないだろう」

「師匠オー！」

確かに論点がずれたことを言った師匠は、俺の大声に驚いたように紫の瞳を瞬かせていた。

そこじゃないだろうが。そもそも誰がこいつは。

「ええ、本当ですかあ？っていうか、そのハヤってどの子ですか？あ、いえ、待って下さい。自力で当てますので」

白髪女は腰に手を当て、じろじろとこちらを眺めまわす。時間の無駄という言葉が頭を掠め、自分があつさり手を上げた。

「いいだろそんなこと。俺だよ。俺がハヤだ。で、あんたは誰だ」

それを聞いて、女は首を傾げて師匠の方を向いた。

「あれれ、師匠。私のことを話してないんですか？姉弟子じゃないですか」

「師匠と呼ばれるほど、俺はお前に何かを教えることができたためではないだろう、ヨミ」

ヨミ、ともう一度名を呼ばれた白髪女は、猫のようににんまりと笑った。それだけを見るならば、人懐っこそうであるのに、さつきまでの言動で色々と台無しである。ホノメやルグナも、呆気にとられたように目を瞬いていた。

「そんなこと、私は気にしてないのですが。ええ、でも確かに、これ以上騒いでいても仕方がありませんので、名乗りましょう」

手に持っていた短めの槍の石突きで地面を叩き、ヨミという名の女は、胸に手を当てて名乗った。

「初めまして、【黒】の弟子。私はヨミ。龍の戦士ではありませんが、これでもそれなりの魔力持ちです。言っておきますが私、かなり強いのです。そのつもりで。さて、こうして名乗ったからにはあなたたちの名前を聞きたいのですけれど、そっちの二人はどっちがどっちなんでしょう?」

「……ホノメよ。あそここの藤色の龍は、アメノ」

「俺はルグナだ!初めましてだな!」

「ははあ、声が大きいんですねえ。いいことですよ、ルグナくん。ちなみに私、姉弟子でもありますけど、歳でも皆さんより上なので、大いに頼りにしてくれて構いませんよ」

「どんつ、と胸につけた薄い金属の胸当てを拳で叩き、ヨミはそっくり返る。」

その様子は完全に面倒見の良さそうな人間のそれで、先ほどのちぐはぐさが拭い去られて消えたようだった。

「わかったと思うが、こいつが今回手を貸してくれる四人目だ。ホノメ、ハヤ、ルグナはヨミと行動しろ。四人一組だ。別れて動いても構わないが、決して一人では動くな。かならず二人以上で動け」

「ここに魔族が出た可能性を忘れるな、と師匠は堅く言い切った。」

「ええ、私は昨日ここに着いたのですけどね、本気で怪しいですよこれは」

「怪しい?」

「ええ、ええ。では、事件のあらましを……と、これは私が語っても構いませんか?それとも、師匠が説明されます?」

「いや、頼む。俺が聞いた話とのすり合わせもしたい」

心得ました、とお道化した敬礼をしてから、ヨミは口を開いた。

この街が襲われたのは三日前。

街を囲む城壁が崩され、門番が十人殺された。それを目撃した住民曰く、いきなり一撃で壁が破壊されたかと思うと、剣を持った骸骨が現れ、門番を切り捨てたのだと言う。続けて現れたのは、腐肉の翼で

空を飛ぶ、屍竜。

屍竜は門の詰め所に飛び込み、中にいた門番を喰い殺したという。だが、屍竜はそれだけを為して骸骨を掴み取り、あっさりと飛び去ったのだ。

後には破壊された壁と詰め所、門番の死体が転がっていただけだという。

それが、街の三か所で同時に起きたのだ。

「おかしいのはやはり、被害が少なすぎるのだと思うのです。本当に魔族だったならば、人間を十人食い殺した程度で自分のほうから下がるなんて、あり得ないでしょう？その上、目撃者まで残してるんです。おかしいことしかありません。この大きさの街に対して、屍竜三体に骸骨数体だったならば、一晩で半分は喰うことができたでしょうに」

けろりとした顔で恐ろしいことを言うヨミは、この周辺大陸中を旅して回っているのだという。どこにも属さない魔力持ちとして、護衛や武者修行のようなことをしていたらしい。

この街の近くまで来たとき、この街が魔族に襲われたこと、そして【黒】が解決のためにやって来るのを聞きつけ、街の人間に自分は【黒】の弟子だったから協力できる、と提案したそうだ。

弟子であるかは証明できたものではなかったが、嘘だったならば追いかえばいいし報酬もいらぬ、と言い張るヨミを、街の連中はそのままにしていたそうだ。実際、ヨミは弟子でこそないが、この様子だと師匠と繋がりがあるのは、本当のことらしかった。

「しばらく前に稽古をつけただけだ。師匠と呼ばれるほどではない」「そうですねえ。でも私にとって、師匠は百年経っても師匠なんですよ。それに、師匠も私が手伝うと言ったのを拒みませんでしたよね？それくらいには信用してもらってると思つていいでしょう。お弟子さん三人も連れてきていてるってことは、師匠も本気の本気で来たようですよ」

だがそれにしてもこの女、滅茶苦茶よく喋る。

ホノメも師匠も自分も、揃って無口でもないがお喋りという性格で

もないため、必要最低限と少しくらいにしか会話をしない。だからあの家は、静けさが常にあった。

そこへルグナが来て大分会話の音量が上がり、ここへ来てこのお喋り女である。

ヨミに肯定も否定も返すことはなく、師匠はこつちを見た。

「ヨミはこういうやつだ。三人とも、こいつと協力して事に当たるように。六時に中央広場へ集合。それからホノメ、アメノはここで待機だ。コクヨウとじやれたりしないよう、よくよく言っておけ」

「はい」

「連絡は以上だ。ハヤ、ホノメ、教えたことを忘れるな。全員、気を付けて事に当たれ」

次の瞬間、師匠は消えていた。

魔力を用いてどうこうではなく、素のままの身体能力で跳んで行ってしまったのである。師匠が消えるのとほぼ同時に、かなり離れたところの森の木が揺れて、鳥が飛び去って行くのが見えた。

多分、駆け抜けていく師匠に驚いて鳥たちは飛んだのである。

目の上で手日差しをつくりつつ、ヨミは軽い口調で言った。

「やあやあ、あの人は相変わらずせっかちですね。いえ、こういう事件ならば当然なのでしょうが。それでは皆さん、ひとまずここから最も近い事件現場へ向かいましょう。ええ、時間は貴重ですからね。それからハヤくん、君の武器はその刀ですか？」

「そうだが」

ヨミの視線は、自分が腰に差した刀に向いていた。初見でこれを刀と正しい名で呼ぶ者は、あまりいない。

大概、変わった形の剣だと思うだけなのだ。だがヨミは、あっさりと名を当てた。加えてこいつの、薄い灰色の衣の前を帯で締め、裾を絞った袴を纏うその装束は、大いに見覚えがあった。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃありませんか。同じ師匠についてた弟子なのに。それにほら、見て下さい」

ヨミが槍の鞘を取り払う。そこにあったのは両刃の穂先ではなく、片刃の白刃そのものだったのだ。

槍ではないその武器の名を、自分は知っていた。

「薙刀というのでしよう？この武器は。私は大陸中を旅していた武者ですし、師匠からも聞いて、君たちの里の武術も知っているのですよ。ですからハヤ君、仲良くしてくださいね」

薙刀を携えて嗤うヨミの瞳は、黒を湛えた闇のようだった。

身構えているふうにも、鬨気があるわけでもないのに、向かい合うとどうしてか刀の柄に手をかけたくなる。一言でいうと、こいつは得体が知れなかった。

「……ああ、よろしくな」

だが、得体が知れなからうが胡散臭かろうが、こんなところで刀なんて抜けるわけがない。第一、ヨミは何も間違ったことを言っていないしやってもない。印象はすべて、勝手な自分の主観なのだ。

会釈すれば、ヨミは同じように挨拶を返して来た。

頭を上げれば、白い髪を風になびかせつつヨミはにこりと微笑んだ。

「挨拶をちゃんとするって、いいものですねえ。ちゃんと挨拶を返してくれる人はいいと知っていますよ、私！ホノメちゃんも、よろしくお願いしますね」

にこにこ懐っこそうな笑みを浮かべたまま、ヨミは薙刀の先に鞘をつけた。ぎらぎらと光っていた白刃は隠され、ヨミは薙刀を肩に担ぐ。

ホノメはヤツミ草の汁を前にしたかのような顔になりつつヨミを見、絞り出すように答えた。

「よろしく。けどちゃん付けはやめて。ヨミさん」

「そうですか？では、ホノメさんで」

綺麗すぎる微笑みのヨミと、苦い葉草を呑んだ顔のホノメの二人を見比べ、自分は隣で同じことをして同じように困惑しているらしいルグナと視線を合わせる。

なんでいきなりこんな特大のややこしそうな人を置いて行ったんですか、ともう気配も辿れなくなった師匠に、届きもしない恨み言を



眩くのだった。

## その八

「ねえ、ホノメさん、ハヤくん。あなたたちは、魔族を見たことがあるんですかあ?」

「……ないわ」

「ねえよ」

師匠から紹介された『四人目』のヨミの言葉に、俺もホノメも揃って首を振った。

ホノメに至っては苦虫を噛み潰したような顔をしており、ルグナは訝し気に直接尋ねた。

「魔族と戦ったことがあるのは、五十年前の時代を生きていた者だけだろう?俺たちの誰もそんな歳ではないぞ」

「あはは、そりやそうですね。いやそれにしても、ハヤくんは無口ですね。ほら、この武器についてとか聞きたいことあるんじゃないんですか?」

くるくると薙刀を回しながらのヨミに、こちらは肩をすくめた。

「薙刀は確かに、俺がいた里にもあった武器だし、扱えないことはない、のだが。」

「別に聞きたいことはねえよ。薙刀なら知ってるから」

「ほう。嗜んだことがおありと。これ、私たちのような女性用の武器だったと思うのですが」

「使える道具は多いほうがいいだろ。さわりだけだ」

そんなことよりも、早く師匠に言われた仕事に取り掛かりたかった。

自分で言うのもなんだが、俺はあまり人懐っこくないし、どちらかというと根が暗くて社交的じゃない。警戒心が薄れるのが、ホノメより遅いのだ。そのホノメだって、身内以外には構えた態度を取るのが当たり前だ。

師匠はあれで結構人に懐きやすいというか、心を開きやすいところはある。まあ、本人が強面美形の無表情なので相手が打ち解けてくれるのは遅いけど。

だから、俺の返答には愛想などなかったのだが、ヨミは気にした様子を見せず含み笑いを漏らした。

「ふふふ、そうですね。師匠の弟子さんだから、やっぱりいろんなことに手を出されるんですね」

「おしやべりはそのくらいにして仕事にかからないと。本物の魔族だとしたら、一大事なんだから」

「はいはいはい！確かにちよつと喋り過ぎましたね。じゃ、行きましようか！」

薙刀を担いだヨミは、すたすたと歩き出す。

俺たちより前にここへ来て、調べていたという彼女は、行き先がどこかをとつくにわかつているらしかった。襲撃され破壊された三か所のうち、北には師匠が向かうそうだから、俺たちが向かうべきは南の詰め所だと言って、すたすた歩き出す。

反対する理由もなく、俺たちも歩き出した。

街中に、人影は少なかった。魔族に襲撃されたということの真偽はともかく、十人の衛兵が殺されたことは真実なのだ。

魔力持ちや龍の戦士でなくとも、この街の衛兵はきちんと訓練も受けている。野盗ごときに遅れは取らないほどの精度や練度があったはずだ。師匠が、教えてくれたのだから。

そのような衛兵たちが殺されたという知らせに人々が怯えるのも無理はなく、外を歩いている者は皆足早で、武器を持った見慣れない俺たちを見ると、ほぼ全員が頭を下げて逃げるように離れて行った。

空つぽの屋台が並んでいる円形広場や萎れた花が飾られた噴水が、なんとも虚しいものに見える。

「静かだな」

「そうね。皆、家の中に閉じこもってるって感じよ」

「いぎ魔族に襲われちゃったら、家の中にいないほうがいいと思うんですけどねえ。建物ごと燃やされたり潰されたりしますから。昔だったら、皆さつさと荷物をまとめて逃げてるか、街ぐるみで早々と防衛を固めてますよ。でも、どっちの動きもないみたいですしねー。こんなふう閉じこもって目耳を塞ぐのがいっちゃんダメと思うん

ですけどお」

ヨミの言うことはそうだろうが、魔族の脅威を覚えている普通の人間は老人ぐらいなものだ。その彼らだって、平和な日々慣れているだろうし、すぐさま臨戦態勢にはなれない。

龍の戦士の弟子になり、毎日魔族の話や殺し方を教わっていないければ多分俺だって同じになっていたかもしれない。

だとしたら、魔族の襲撃のことをよく知っているように語るヨミはやはり素性が謎だった。まるで、自分が直に感じた脅威をしゃべっているようだ。

……まあ、魔力持ちや龍の戦士には、外見が若々しいままのやつもいるけど。師匠とか、ルグナの両親とか。

そのまま、微妙に無言で四人で街中を歩き、ヨミが足を止める。

「おっと、到着しましたよ。あそここの詰め所が襲われた場所です。いやー、もう見事に壊されていますね」

「ヨミさん、あまり軽く言うものじゃないと思うわ。人が死んだのよ」

「これは失敬。ホノメさん」

「……」

藤色の瞳を細めて、ホノメはヨミを見据えたあと歩き出す。

衛兵の詰め所というのは、一定間隔を開けて建てられた城壁内の小部屋である。完全に壁の中に隠れていて外からは見えないものも、塔のように突き出しているものもあり、形は多少異なる。が、どちらも城壁の一部となっている点は変わらない。

そこが壊されたということとは、有体に言っただけで街を囲む城壁が崩され、穴が開いているのだ。

一部が崩れた壁の側には、布がかけられたものがいくつか地面に並べられていた。

それは、死体だった。殺されたという衛兵の死体だろう。

三つ並んだ死体の番をするためか、直立不動で立っていた兵が一人、こちらの姿を見てぱっと顔を輝かせた。

「あのーそちらの藤色の瞳のあなたは【黒】の弟子であるホノメ様でしょうか？」

「ええ、私がホノメです。襲撃事件の調査に参りました。そちらの方々のご遺体を改めて、よろしいでしょうか？」

「はいー」

威勢の良い声を出す兵に軽く頭を下げて、俺たちは遺体の周りを取り囲んだ。

遺体に手を合わせて会釈してから、布の端に手をかける。

「取るぞ」

ホノメとルグナが軽く頷くのを見てから、遺体を覆っていた布を取り去る。

果たして、下にあつた遺体を見て俺たち三人はほぼ同時に顔をしかめた。

死んでいるのは、おそらく二十代半ばの男だった。見た目だけで言えば、二十代の初めから外見が変わっていない師匠よりも少し上だろう。

右肩から左の腰までがぎっくりと斜めに斬られており、赤黒い内臓や肉が見えている。これが、死因らしかった。

一人目をそうやって確かめてから、残りの二人を順に見て回ったが、全員似たような傷で死んでいた。

袈裟懸けに斬られて死んだ一人は恐らく不意打ちされたらしくろくな抵抗のあとはないが、残りの二人は剣を抜いて応戦するところまでは行ったらしい。

だが片方は首を斬られ、片方は額を割られて死んでいた。剣で防御したもの、その防御ごと斬られたと見えた。

偽の魔族にしろ真の魔族にしろ、よほどの怪力の持ち主にやられたのだろう。

「……力任せな刃物傷、だな」

「ええ。切れ味も悪そう。切れ味の悪い刃物で、叩き切ったって感じよ。手入れてない鉈とか、斧とか。それこそ、ハヤの刀術と真逆のものね」

「だが、魔族の骸骨兵の得物は大概切れ味の悪くなった武器で、しかもそれを叩きつけるように振るうと聞いたぞ。傷口や状況と合ってい

るのではないか？」

「だよなあ。だけど、骸骨兵つてのは偽装もしやすい魔族でもあるだろ。魔力持ちが、武器持たせた骸骨を操っても同じことができんだからな。屍竜はまず死体を見つけるのが大変だが、骸骨は手に入れやすいし」

「魔族特有の魔力が残ってたらわかるんだけど、駄目そうね。……ああ、やっぱり駄目ね。反応がないわ」

いつの間にか、腰に吊り下げた道具袋の中から丸い時計のようなものを取り出したホノメが肩を落とした。

魔力の種類や量を測るための【魔力針】で、ホノメが使っているのは師匠の友人が改造して特に魔族の魔力をよく測れるようにしたものだ。それで駄目だと言うならば、俺たちの魔力探知能力では探せない。

「つて、あれ？ヨミさんは？」

遺体を眺めてどうしたものかと考えかけたとき、ふと思い出した。騒がしかった白髪女の姿が、消えていたのだ。

どこへ行つたのかと辺りを見回したちようどそのとき、崩れた壁の影からひよこひよここと薙刀の先が動いているのが見えた。

続けて、ひよこりと彼女本人が現れる。

「ここですよー！こつちに竜の痕跡らしものがあるので、来てくださーい！」

その一言に、俺たちは一飛びでヨミが経っている城壁の下へ向かう。

「ここですよ、この崩れたところ。ほら、尻尾が削つたみたいになっちゃませんか？なんかの汁も残ってますし」

ヨミが指さす砕けた岩の壁は、確かに何かがかすれて付いた跡があった。茶色のかすれた線が、何本か岩に残っている。

指でその汚れに触れ、指先についた液体の臭いを嗅いでみれば、鼻を突くのは間違いなく肉の腐った腐臭である。

この壁を壊したと言われている屍竜は、腐った飛竜の死体が【混沌】に飲まれて生まれた魔族だから、少なくともこの壁を壊したのは腐つ

た死体を使った何ものかであるのだ。

……まあ、偽装のために腐肉と腐汁を使った可能性もあるが。そうなる何のために魔族の襲撃を偽装し、衛兵を殺して壁を壊すだけで逃げて行ったのかという疑問も残る。

「ちよつとハヤ、妙な痕跡に素手でいきなり触れるなんて危ないじゃない。毒ならどうするのよ」

「それくらい魔力で確認してるっての。これ、間違いなく腐肉だぞ」  
「腐った体の生き物がここを通ったことは間違いなさそうだな。だが、どうやって壁を壊したんだ？ 屍竜が体当たりで壁を壊したならば、もっと痕跡が残るだろう。肉片とかなんとかが」

「そこだよな。……すみません、ちよつと話聞かせてもらえますか？」

壁から飛び降りて、地面にいる兵に近づく。

俺よりも何歳か年上らしい兵士は、こちらが話しかけるとまた背筋を伸ばした。元々これ以上ないだろうってくらいに直立不動な姿勢だったのに。

さつきも、ホノメに様をつけて呼んでいた辺り、五翼将の弟子という肩書は十分な威光があるようだった。便利だから、当然のこと有難く使わせてもらうが。

「はい、何でしょうか！」

「壁を壊したのは屍竜だと聞いたんですけど、具体的にどう壊したんですか？ 体当たり？ それとも、魔力で？」

「私はそれを見ておりませんが、目撃者である市民によれば硬い物が碎けるような凄まじい音がしたので走って確かめに行つたところ、壁が崩れ死体のような竜が飛び去るところだったと！」

「つまり、壁が崩されたその瞬間を見ている人間はいないんですね？ 俺たちは、一撃で壁が壊されたと聞いたんですが」

「そういうことになります！ しかし、壁が崩れる音は一度しか聞こえなかったので一撃で破壊されたのだろうと判断しました！」

「わかりました。……目撃者は、皆そのような証言を？」

「はい！ 全員物音がしたので確認しに行つたところ、壁が壊され死体の竜が飛び去るところだったと言っています！」

「全員が……う？そうですか。ありがとうございます」

頭を下げて、城壁から飛び降りていたホノメたちのところへ戻る。俺と兵士の会話は聞こえていたようで、ルグナとホノメは顎に手を添えていた。

ヨミは薙刀を肩に担いだまま、ニコニコしているだけだった。先に調査していたという割に、ここまでほとんど自分の意見を述べてないこいつは何なのだろう。

「どうだこれ？俺は、その目撃者の市民って人に話を聞きたいんだが」「同感よ。幸いこつちにはルグナがいるし、心読みもいざとなったら使いましよう。ルグナ、やれる？」

「やってみよう。訓練は受けているからな」

「よし、なら行ってみようぜ。師匠には伝えるか？」

「私が念話してみるわ。師匠も同じことを考えているかもしれないし」

こめかみに指を当てて目を瞑り、ホノメは意識を集中する。しばらくして、目を開けたホノメはうんと頷いた。

「行ってこい、だって。人間相手の尋問は俺たちよりお前たちのほうが向いているから、任せてくれるそうよ」

「……師匠」

信頼してくれているのは嬉しいのだが、そこまでずばつと豪快に丸投げに頼まれるとは思わず、ホノメと俺は顔を見合わせて少し遠い目になった。

最強の五翼将だというのに弟子の俺たちに頼ること、自分より弱い他人の力を借りることにまったく躊躇を見せないのは、良くも悪くも自分自身に拘りが無い合理的な師匠らしいと思うのだが、もうちょつと自分の交渉能力に自信があつていいのにと思ったりもする。

確かに、師匠はどちらかという背中控えたコクヨウで圧をかけて口を割らせる方法が得意だろうけど。

よつぽど、師匠は自分の無表情と口下手を悪く重く考えているのだろうか。大事な人にそのせいで嫌われてしまったりとか。

ぱん、とヨミが手を叩いたのはこのときだった。



「お話まとまったみたいですねえ。ちなみに私、目撃者の皆様方の場所を知ってますので案内できますよ?」

「それならお願いするわ。ありがとう」

「いえいえ、さつくりと解決してしましましょう」

「そんな簡単に行くのかよ」

「やってみせるんでーすよ。私たちはこういうときのためにいるんだし、戦う準備つてものをしてる人間なんだから。そうでしょ?」

白い髪の少女は、黒い瞳をやけに強く鋭く光らせてそう言い切ったのだった。

## その九

ヨミによれば、魔族の襲撃事件の目撃者たちは街にいくつかある役所の一つに集められているらしい。

唐突な襲撃に全員が衝撃を受けているために集まってもらっているらしいが、街に混乱を広げないために隔離しているという側面もあるのだろう。恐怖に怯えて焦った一般人が、あることないことしゃべりまくり、噂として流されたらとんでもないことになるのは目に見えるている。

何にせよ、こちらとしては一か所に固まってくれているならば話は聞きやすい。

既に目撃者とは顔を合わせているというヨミに導かれるまま街を歩き、出会った五人の目撃者たちは俺たちを見るや驚いたように目を瞬いた。

それもまあ、よくある。

最強の龍の戦士、「黒」の弟子、という評判を聞いた人間が想像するのは、大体屈強な戦士である。

だが、師匠の弟子はこれまでホノメと俺の二人だけ。

抜きんでて屈強でもない少年と、可憐な黒髪の少女という組み合わせを見て、狐につままれたような顔をするやつは珍しくない。そこにルグナが増えたところで、大して印象は変わらないだろう。

「初めまして。私は五翼将【黒】の弟子、ホノメです。こちらは同じく弟子のハヤとルグナ。あなた方のお話を聞きたいのですが、構いませんか？」

が、ホノメは気にした様子も見せず凜と彼らに尋ねた。

その半歩後ろで、ルグナはいつもとは打って変わって静かに彼らを見ている。

精神感応力が高い魔力持ちは、上手く狙いを定めれば人の心を読むことも、本人が忘れてしまった記憶を呼び起こすこともできる。

だが、人の心を読み、中へ入り込むのは人間の最も複雑で、触れら

れたくない領域に踏み込むことである。

精神感応で人の心に潜ることを、俺たちは「心読み」と呼ぶが、これは念話のように表面的なやり取りではなく、やりようによってはそのものを操れる危険な技術であった。

術者本人も、下手をすれば自分の心を相手の心の中から引き離すことができずに自分の体へ戻れなくなる危険がある。

ルグナは、どうやら自分の強い精神感応の力を制御する訓練と「心読み」の訓練を両方受けているようだった。

俺たちの前にいる目撃者は、男が三人と女が二人。

若い男もいれば老いた女もいて、如何にも適当に街中で見つけた五人を集めたと言えそうな雑多な感じがあった。

「黒」の……ということは、「青」のレト様のお弟子様ですか？」

ホノメに尋ねたのは、品がいい感じの老女だった。ふわふわとした白髪を丁寧に整え、薄紫の布を肩から羽織って足元には持ち手のついた籠を置いている。

だが、彼女の言った名前にホノメの肩が少し揺れた。師匠のかつての名、「青」を知っている者は少ないのだ。

かつて「黒」の龍乗りであったアジィザが結界になってから、その名は師匠に引き継がれた。アジィザの相棒だった黒龍や、形見になった剣とともに。

一番に「青」の名を出すということはつまり、この老女は俺たちが知らない時代の師匠を知っている人になるのだろう。

「そうです。ですがまだ未熟者故、私たちに様は必要ありません。私たちは師匠と共に、魔族襲撃の調査に参りました。こちらは私の弟弟子のハヤとルグナ。協力者であるヨミさんです」

「よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひしますー」

俺は淡々と、ルグナは堂々と、彼らに対して挨拶をする。

五人の目撃者のうち、三人はこちらの挨拶を聞いて顔を強張らせていた。五翼将の弟子が武装して現れたことに緊張しているようにも、経験のなさ気な少年少女を前に不安になっているようにも見受けら

れ、俺は目を細めて彼らを眺める。

「話は一人ずつ聞きたいのですが、別の部屋を用意してもらえますか？」

まあそうなるよな、とホノメの声を聞きながら、じつと相手を視る。俺には心を読むことはろくにできないから、代わりに人の仕草や振る舞いを読もうとする。嘘をつく人間にはやはり特有の動作があるのだ。

尤も、何ら表に出すことなく嘘を突き通せる恐ろしいほどの詐欺師もいるし、そこまでの領域に至っている人間を見抜けるとは思っていない。

自分の洞察力が至らぬことを上で『目撃者』たちを見てみる。

全員怯えていて、全員俺たちに身構えている。それは当たり前だけれど、何かが引つかかる。

植物の棘のような、違和感があるのだ。

けれど、何かを掴む前に俺の肩を掴む手があった。

「ハーヤくん。怖い顔になっていますよ。市民の皆さんを怯えさせたら駄目です。大好きな師匠と同じになっちゃいますよ?」

「別に大好きじゃねえよ」

「おやや? そうですか?」

全方位に空気を読んでない空気を醸し出している白髪女、ヨミである。

後ろから俺の肩を掴んでこちらの思考をブチ壊してくれたのヨミは、口が笑っているのに目が笑っていない普通に怖い顔をしていた。

「……俺に小言言うんなら、ヨミもちつとは雰囲気隠せよ。せめて目を優しくしろ。バレるぞ」

「おやおや、何がバレると思うんです?」

「あんたがさつきから怒っていることだよ。目、全然笑ってねえぞ」

あややと戯けた仕草で自分の黒眼を手で隠すヨミだが、却って空々しいものがある。

軽くため息が出、小声で続ける。

「ヨミが何に怒ってるか知らねえけど、面に出すなよ。目撃者たちが

怯えて口を利いてくれなくなったら困るだろ」

「お優しいですねえ。恐怖で口を割らせるって方向に持って行く気は？」

「あるわけねえよ。俺たちの義務は一般人を守ることだ。……それに」

ちらりと気配を探り、市民もホノメもこちらを見ていないのを確認する。

ホノメたちと俺たちの間にいるルグナだけはこちらと向こうをちらちらと見比べて器用に両方に気を配っていたが、まあこいつになら聞かれてもいいかと判断する。

判断してから、目の前で薙刀を携えたままの白髪女に向き直った。

「……それに、人間が一番情報を落としてくれるのは気が緩んだときだろ。安心させて口を緩ませてぺらぺら話してもらいたいのに、あんたが俺たちの近くでギラギラ怒ってちゃ台無しだ。キレてるドラゴンの大口を前にして楽しくおしゃべりしてくれるやつがいるか？」

殺気を感じ取って即座に反応できない普通の市民であっても、強者の怒りはわかるだろう。

むしろ、本能的な身の危険を感じ取って怯えてしまう。怒りや嘆きなどの自身の感情の発露に、時として魔力の漏出が伴う魔力持ちを前にしているならば尚更だ。

魔力持ちとそうでない人間の力の差など、下手をすれば猫とドラゴンぐらいある。

己の感情で以て地を捻じ曲げ、炎を迸らせ、氷の槍を降らせ、風の刃を吹き荒らす魔力持ちの怒りは、魔力のない人間にとっては災害である。

要するに、お前の顔と雰囲気やババいし怖いからもうちよいどころかしろと俺は言いたかったのだ。

そも、戦時でもないのに薙刀とかいう見慣れないデカイ武器を、細くて華奢な片腕で軽々引っ提げている時点で自分がまあまあ不審者な自覚、ないのだろうか。ないか。ないよな。ないだろう。

周囲への洞察力は高いのに、自分の影響力とか魅力に疎い師匠みた

いなタチだったら勘弁である。

どう出るのかと身構えていると、ヨミはじいところらを見ていた。黒い瞳の中に、いつも通り目つきのよろしくない少年が映っている。

一体全体何を考えているのかとこちらが考えている間に、ヨミはやおら表情をくると変える。

ちろちろとした熾火のような怒りが引つ込み、代わりに現れたのは夏の太陽のようなやかましい笑みだった。

「ふふふ、ハヤくんって思っていたより面白いですね。地はそっちですか？」

「地も何もねえつての。俺は元からこうだよ」

「そうですか。そうですね。私の勝手な判断で君をつまらなそうで、期待できない子だなって思ってしまった。ごめんなさいね」

「はあ?……子つてなんだよ、そんなに歳変わんねえだろ」

「どーうでしょうね?」

そのふざけた言い方に、こいつやっぱり見た目若作りしてるクチかと思うがさすがに口に出せない。

とにかくもヨミの中で俺への評価はいきなり上方修正されたらしく、目の奥の冷徹さが消えていた。

「すみませんねえ。師匠が大事にしてる形見の剣を持ち出した愚か弟子で、魔力放出できない超未熟者だとも聞いてたので、かなりナメてました」

「……あつそ。俺がクソ馬鹿で雑魚なのは否定しねえからそのままでもいいぞ」

「卑屈ですねえ。さつきから私と話しながらずうっと、ホノメさんたちのやり取りを観察して警戒までしてるの?」

無意識に小さく肩がはねるのを、俺は止めることができなかった。

「……」

「ハヤくん、私のこと全然信用してないでしょお?私がホノメさんからルグナくんに斬りかかっても、必ず初撃は弾ける位置にいますからね。だから私は、君の背中にしか話しかけられなかったし。隙が掴み

にくすぎて笑えましたよ」

「……あいつらは薙刀の間合いも、戦い方も知らねえだろ。けど俺は知ってる。俺が一回弾けば、その時間稼ぎだけで十分だ。それだけあれば、あいつらなら魔力であんたを制圧できる」

ヨミを信用なんて、できるわけがないだろう。

師匠の古い知り合いであつても、いやだからこそ腹に何抱えているかわかったものではない。

師匠は強いから、強いからこそ自分が他者を守るべきだと当たり前のように考えている。

自分が仮に他者から無茶を押し付けられても、言いように便利に使われても、それが多数の幸福になるならと、許容するのだ。戦いとは戦える力を持つ者が元来すべきだと、透徹した意志を持っているから。

圧倒的な力を持つドラゴンと契約し、人のまま人から外れた強者の在り方としては、この上なく尊くて、都合が良いものかもしれない。

ドラゴンの乗り手は、いつだとして人を守るためにある。

師匠の一番大事な人である妹弟子だつて、世界を守るためにいなくなつてしまった。

俺たちの遠い姉弟子になる彼女が何を考えてそうしたかはわからないけれど、師匠とその人は似ているのだろう。

魔族との戦争を経て生まれたドラゴン乗りの存在意義がそこに集約するのは当たり前かもしれないし、半端なく高潔な精神がドラゴンに備わってなければ人間社会は崩壊してしまうのも事実。

実際、ドラゴンとの契約によつて魔力持ちたちが生まれ、人類の歴史は決定的に変質した。

だけれど、俺は師匠たちにとつて当たり前前の自己犠牲が好きじゃない。

師匠がそうあり続けるのも、ドラゴンと契約したホノメがそうなつていくのも、好きじゃない。

どんなに強かつたつて、どんなに守る必要なんかなくたつて、二人が搾取されるのは嫌だ。

二人に比べて、俺の警戒心が強く、疑り深くて口が悪くて、鬱屈したひねくれ屋になったのも、結局俺の我が儘の結果だ。

二人には二人の信念があつて、他人に無償の善意を注いで自分の居場所を確保しようとする卑屈さもない。

そうありたいから、あるだけなのだ。

だから俺も、やりたいことをしている。

にこやかな笑顔の裏で、へりくだった態度の奥底で、他人が師匠にどんな無理難題をふっかけようとしているのか、ホノメをどう利用しようとしているか、ずっと見ている。ずっと、考えている。

幸いなことに、ドラゴンと絆を結べていない、魔力をまともに扱えない俺は弱いから。

弱いから、気にされないのだ。

よつて、俺はまったくヨミを信じていなかった。

というか内心が読めなさすぎるし、普通にチャラ過ぎる。ムリ。性格が合わないきつと。

だのに、白髪女は完全に気を良くしたらしい。

「イイ！実にはイイですねえ！その油断してないところも、わざと刺々しくしているところも！大方あれでしょう、自分が嫌われ役をしてたら大事な姉弟子さんが立ち回りやすくなるっていう打算入ってたんでしょー？君、地金はイイヤツ感出てましたからねえ！その気になれば、人に好かれるよう振る舞える人間じゃないですかあ？」

「なわけねえだろ。俺の態度が悪イのは素だ」

「態度が悪い自覚がある時点で、心底悪いやつになりきれてない感出てますよお？何よりも、心読みできるルグナくんは信用されてるんだから、その言い訳ムリですつてば。心が読めて感じ取れる人間は、自然他人からの感情に敏感になっちゃうわけで。心読みが得意で良い子のルグナくんとかちゃんと仲間できてるハヤくんは、必然良い子なんですよお。少なくとも、悪人じゃあり得ません」

口と態度が悪いのは本気でただの素であると、言い返そうとしてやめた。

人の話を聞いてない感がやばいし、ヨミの口は回りすぎでとてもで



はないが太刀打ちできない。何言ったって明後日の方向に解釈され、言い訳してみるだけだ。

ろくにしゃべくつてもないくせに、何故ルグナが俺を仲間として見ているとわかるのかと言いつ返し返そうとも思ったが、よく考えたらルグナはさつきから俺とヨミのとてもお互い友好的ではない会話にずっと気を配ってくれているのだ。

勘が鋭ければすぐ気がつく。

お前が俺に対して仲間意識あるのバレバレじゃねえかとルグナを睨むと、ルグナは何で睨まれたかわからないとばかりに首を傾げて返してくる。違う、そうじゃない。察してくれバカ。

「ほらほらあ、そうやってルグナくんと目と目で会話できてるんだから信頼度高いんですよ？君、ほんんと興味深いですねえ」

「あんだ、頼むからもうしゃべんな」

「でも精神はまだ脆そうですね？これぐらいの言葉責めで音を立ててちゃまだまだですよ」

「妙な言い回しすんな。誰が音を立ててんだよ。あんだが面倒くさいから話したくなくなってるだけだ」

「そうですね。それじゃ、話すのが面倒なハヤくんにはここにいるよりも役に立ってる場所がありますよー」

「は？」

言うなり、ヨミは異様な速さでこちらの利き腕をむんずと掴んだ。どんな馬鹿力なのか、万力のような締め付けに動きを固定される。背筋が一気に粟立った。

ヨミは、そのまま声を張り上げた。

「ホノメさん、ルグナくん、ちよつとハヤくんをお借りして街を回ってきますね。普通の聞き取りに、【黒】のレトのお弟子三人も要らないでしよお？」

振り返ったホノメは藤色の瞳を細めた。

多分、ヨミが俺の腕を鷲掴みにして絶対に離す気がなさそうなのがわかったのだろう。

やや固い顔で頷いた。

「わかりました。ヨミさん、ハヤは好きに使って構いませんが、きちんと帰してください。ハヤもそのつもりで」

「俺が物みてえな言い方すんなよ。わかってるって」

ある程度ヨミの好きにさせていいし、彼女に協力してくれて構わないけれど、危なくなればすぐ戻れとホノメは言いたいようだった。

さすがに長年の付き合いがあるため、ホノメが本音に建前を被せていればわかる。

持つて回った言い方をした辺り、ヨミを警戒しているのは、ホノメも同じらしかった。

こちらに疑われている白髪女は、まったく気にしたふうもない。

「君の大事な姉弟子さんの許可も出ましたし、これで安心ですね。私を手伝ってくださいよ、ハヤくん」

薙刀の白刃をきらめかせながら言う女に、俺は無言で頷くのだった。

## その十

かくして、ホノメとルグナ、ヨミと俺という二人組に別れることになつた。

師匠からは最低二人組で行動しろと言われていたので、恐らくこれでも問題ないだろう。

荒事になる可能性もあるが、そのときはそのときと割り切るしかなかった。

「ヨミ、あんた何か心当たりでもあんのか?」

「あるから離れたんでーす。私のほうこそ聞きたいことがあります。ハヤくん、君はさつき何か考えこもうとしていましたよね。だからちよつとだけ私から気が逸れたようですし。その考えの内容、聞かせてくれませんか?」

「はあ?……考えつたつて、大したもんじゃねえぞ。何かあの目撃者たちに引つかかかったつてだけだ」

「でーすからあ、私はその引つかかりを聞きたいんですよ。教えてくださいよ」

どこがどう引つかかかったのかを突き止める前に、ヨミに肩を掴まれて色々頭から吹っ飛んでしまったのだ。

あのときの違和感と、この街に着いてから印象を合わせて思い出そうと顎に指を添えて考える。

壊された城壁に上つたとき、衛兵からの話を聞いて、彼らの同僚の遺体を見たとき。

それから、目撃者たちの話を聞いたとき。

すると、とても些細な棘を思い出した。

「お。その顔は何か思い出したようですね。何ですか?」

「……本当に大したことじゃねえぞ」

言い訳みたいに前置きしてから、記憶をなぞりつつ口を開いた。

「衛兵たちから話を聞いたとき、彼らは目撃者が全員飛び去る竜を見たつて言つてた。確かにおかしくはなさそうなんだが、どうも……全

員が全員、口を揃えて同じ証言をするってのは珍しい気がしたんだ」  
「ふむ？」

「この街は五十年前から平和だ。住民たちのほとんどは魔族なんて見たことないだろう。いきなり壁が竜によって壊されるなんて異常事態を前にしたら、訳が分からなくなつて辻褃が合わないことを言い合つてもおかしくねえ」

たとえば以前、こんなことがあった。

ホノメと俺がまだ師匠と出会う前、故郷の里にいた頃のことだ。

子どもらのみで集まり、森の中で戦いの訓練をしていてつい時間の経つのを忘れた俺たちの前に、熊が出たのだ。

間が悪いことに、その日は冬が明けたばかりで冬眠から目覚めたばかりの熊は腹を減らせて気が立っていた。

常なら人里の人間を無視する熊はこちらに襲い掛かつて来、とんでもない阿鼻叫喚の大騒動になったのだ。

その場にいたのは、俺とホノメ含めた子どもたちばかり。

全員狩りの経験はあれど、獲物は精々小鳥程度で熊狩りなどの経験はまったくない未熟者揃いだ。

逃げ惑う子どもらの中、ホノメが魔力を放出して熊を怯ませる炎を放ち、俺が身体能力を強化させて熊に大岩を投げつけることでどうにか退散させたが、人里に這う這うの体で全員帰ってみれば、実におかしなことになっていたのだ。

曲がりなりにも立ち向かえたホノメと俺には、敵が冬眠で腹を減らした熊であることは認識できていたのだが、泣き叫んで恐慌状態になった子どもらの一部には、熊がただひたすらに大きくて真つ黒い化物に見えており、あれが魔族だとまで言い立てるやつがいたのだ。

あれは魔族でも何でもない熊だとホノメが理路整然と述べても、そんなわけねえだろと俺が言い返しても、あれは化物だと泣くばかりで話にならなかつたほどだ。

飢えた熊に子どもたちが遭遇して、重傷者が出なかつたことが奇跡だと言われるほどの事件だったが、つまり、信じられないことを目にした人間の記憶などまったく当てにならないと俺はあれ以来思つて

いる。

怯えれば、狼狽えれば、人間はありもしない幻があると簡単に思い込み、現実を歪んで捉える。

自分が理解しやすい形に記憶を改竄する。

何のためかかって、自分の心を守るためだ。

魔族の竜など、熊よりも恐ろしい化物だ。

なのに、目撃者たちは確かに屍竜が飛び去ったと主張している。

五人しか目撃者がいないし、全員大人なのだから俺たちのときのよ  
うな食い違いはなくて当たり前かもしれないが、それでも食い違いが  
ないという点が引つかかることは引つかかったのだ。

けれど、ヨミ相手に自分の推論を口にすれば、口にするだけ大した  
ことのない違和感だという気がしてくる。

この街にいるのは、怯えて泣き叫ぶ羊の集団のようになった子ども  
たちではないのだから。

「ふーむふむ、そこに引つかかったんですね」

が、ヨミは考えすぎだと笑い飛ばすことをしなかった。

薙刀を器用に片腕で維持しながら、もう片方の手で自分の細い顎に  
手を添えて考える仕草をする。

「良い線行ってるかもですよ、ハヤくん。私もですね、あなたたちが到  
着するより前からこの街を回っていたんです。で、衛兵さんのふりを  
してこそつと彼らから話を聞いてみたんですがね。皆さん口を揃え  
て、あれは屍竜だって仰るわけですよ。でもですね、五十年も生きて  
ない一般人含めた人たちが、どうして屍竜だっけはつきり言えるん  
でしょう？ 言い方にねえ、断定するような強さがあつたんですよこれ  
が  
また」

「凶鑑や記録映像はあるだろ」

「そう言われちゃそれまでなのですが、どうにもねえ。証言が揃い  
すぎてるって気がするんです。整いすぎてます。恐怖に駆られた人  
間がどれだけめちやくちやになるか、君もちよつとは心当たりあるん  
じゃありません？ かの赤の巫女さんこと【黒】のアジイザだって、あ  
れだけ苦勞して世界に警告を発したのに、恐怖に駆られたごく一部に

は魔女扱いされる始末ですよ。めちやくちやに理不尽だと思いませんか？彼女は、ただの事実をこの上なく効果的な方法で言い残しただけだと言うのに」

「……」

その例えを持ち出すのはやや的外れではと思わなくもなかったが、ヨミの主張は理解できた。

要するに、俺たちは同じところに違和感を覚えたのだ。

発言が、綺麗すぎると。

「証言が揃いすぎている場合、考えられる理由は単純です。何だと思えますか？」

「……口裏を合わせて、全員が示し合わせてる場合か」

「ええ、はい、そうですね！なら、何のためにそんなことをするのでしょうか？」

「わからねえよ。現に衛兵は十人も殺されて、城壁は壊されてる。これだけのことを引き起こした相手を街の人間が庇う理由があるのか？」

死人が出ているのだ。なのに、衛兵に護られるべき市民がそんなことをする理由なんて何も思いつけなかった。

ヨミは、かつんと靴音を響かせて立ち止まって振り返り、人差し指を立てて左右に振った。余裕ぶったふうである。

「いえいえ、そうじゃありませんよ。君、悪ぶっててもやっぱ根が善寄りですね。人間的にはいいと思いますが、裏の裏まで考えて悪意をもっと見抜けるようにならないと大事なものを守れないですよ？」

「あんたに説教されてる時間は無い。そんなに言うなら、何か考えがあるんだろうな」

「はいはい。でもですね、それを今ここでしゃべっちゃっても勿体ないので探索を続けましょう。大丈夫です、当てるはあるから君を連れ出したんですよ」

「勿体ないってあんたなあ……」

人死に出ているんだぞと、言いたくなって口を噤む。

軽い口調だが、ヨミの眼光は鋭いし和らいでない。

この街中で絶対に武器を手放さないこいつには、こいつなりに本当に考えがあつて、ちゃらけているのはただの作戦とも考えられた。

本当に素でちゃらけてこちらを振り回して楽しんでるなら怒るが、こいつの行動で今回の事件が片付くなら面白い。

自分自身の堪忍袋の限界も感じながらになるが、そこは己の忍耐力でどうにかするしかない。つい先日、師匠の大事な剣を持ち出すというトンでもないやらかしを引き起こしたばかりの自分だが。

「で？その当てつてのは何なんだ？」

「よくぞ聞いてくれました。こつちですよ」

言つて、ヨミはずんと進んで行く。

辿り着いた先は、先ほど調べたはずの衛兵隊の遺体が並べられた安置所だった。

調べが済んでいないために遺族は引き取れず、医者解剖もまだらしい。

半地下の安置所は城壁の一角に設けられており、当然門番はいる。けれど、俺が名前を名乗るとやや訝し気な様子を見せながらも通してくれた。

「助かりましたよお。私だけだとやっぱり遺体には簡単には近寄れないんですよね。レトさんつて、どうして私を弟子にしてくれなかつたんでしょうか？」

半地下の階段を下りながらもおしゃべりがやまないヨミに、こちらはむつつりと返した。

「師匠に聞けよ」

「聞いて教えてくれると思います？そもそも、言つてくれても私が理解できない理由からかもしれないじゃないですかあ。お弟子さんなら何となくわかるのでは？」

「……」

師匠の世間ずれはわかるだけに、俺には答えられない。

答えられないからさっさとヨミを誘導し、階段を下り切つて石の台の上に並べられた遺体へ近寄る。

低い室温と空間全体にかけられた物質保存の術で、遺体の腐敗は進

んではないなかった。湿っぽい空気を肺に取り入れて、また重く吐き出す。

丸太のように並べられた体には、既に魂がないのだ。

絶命と共に魂は体から離れて心は壊れ、ここにあるのはただの抜け殻。

二度と、彼らが彼らとして動き出すことはない。

今更遺体を前にして何をするつもりなのかとヨミの方を向けば、彼女はなんと片時も手放していなかった薙刀を石台に立てかけていた。

「何するつもりなんだ？」

「ちよつと特殊な魔力の使い方をお見せしようと思って。ハヤくん、今から私がするのは私の故郷の秘中の秘技なので内密にお願いしますね」

「ああ。……とつとと解決できるなら何だつていいさ。あんたが言つてほしくねえなら、誰にも言わねえよ」

師匠が教えてくれるドラゴンの知識だって、教えてはならないと言われるものが数多含まれるわけで、他人の知識や技術を吹聴したりするつもりはなかった。

そも、人里離れたところに少人数で暮らし、修行漬けの日々を送つていて、師匠たち以外との他人との交流が極端に少ない自分が誰に話すのかという面はある。

ヨミは、軽く片頬だけで笑った。

「わかりましたあ。ありがとうございます。では、驚いて腰を抜かさないでくださいね。あとそっちの薙刀持っていてくれると助かります。倒れると困るので」

「……はいはい」

立てかけられていたずしりと重い薙刀を取り、隅に引っ込む。

仰向けにされた遺体を前にしたヨミは、まずその上から布を取り除いた。先ほどと同じ惨殺された遺体の土気色の肌が見える。

ヨミは瞳を閉ざした遺体の顔の上に手をかざし、自分も目を閉じる。

かざしたまま、鼻歌のような小さな唄を唄い始めた。次いでヨミの



体の周りに螢火のような光の粒が現れる。

ふわふわと、空間からにじみ出るようにして現れた粒たちは増え、集い、くるくると回り始める。まるでヨミの唄声で呼び寄せられたかのように。

何故だろう。

螢火はとても美しいのに、見ていると背筋が寒くなった。

儂い光の珠がただ薄暗い空間を照らすように漂っているだけなのに、目を逸らせない。

美しいものに見とれて視線を奪われるのではなく、恐ろしいから動けない。

何をされるかわからないから、警戒心によって見続けるしかないのだ。

ヨミは、その光を纏わせたまま尚も唄を唄い続ける。

唄に合わせて光の珠は乱舞し、旋回し、次第に数を増やして縦横無尽に空間を舞い踊った。

それに伴って悪寒はますます強くなり、鳥肌が止まらなくなる。

遺体に乗った石台が並べられた半地下の薄暗い穴倉のような部屋の中を、何百匹もの螢が飛び回るようなこの光景がいつ終わるのかと考え始めたとき、ヨミがかつと目を見開く。

唄い止めて衛兵の顔の上にかざしていた手を下ろせば、時間が止まったかのように光の粒は空中でぴたりと静止し、瞬きの間に力を失って床へと落ちていく。

床に叩きつけられる直前で光の粒は内側から弾けて消えて行った。

かしゃん、と薄いガラスの板が砕け散るような呆気ない音と共に。

その音と共に、ヨミの体がぐらりと傾いだ。

白髪が揺れて体が横に倒れそうになる。

「おっー」

薙刀を持っていない片方の腕を咄嗟に伸ばし、何とかヨミが頭を床にぶつける前に支えればほっと息が漏れてしまう。

「おっ・ありがとうございませす」

「びつくりさせんな。いきなり丸太みてえに倒れるなら最初から教え

ろよ」

「ありやまあ……すみません?」

「何で疑問形なんだよ。大丈夫そうなら腕離すぞ。つーかやつぱ自分の武器はちゃんと持て。俺が刀抜けなくなるじゃねえか」

腕を引っぱってヨミを立たせ、薙刀を押し付けるようにして返す。

元の通り己の武器を手にしたヨミは、探るような目をちらりと遺体に向けたあと白髪を手で整えた。

「それで?何かわかったのか?そもそも、あんた一体何をしたんだ?」「うーん、ちよつと難しい話になりますから座りませんか?あちらに椅子がありますし」

調査の際に使うためなのか、飾り気も何もない丸椅子とテーブルが置かれた部屋の片隅の空間をヨミは指さす。

無言でそちらへ歩いて行き、椅子の一つをヨミに押しやって自分も座ると、ヨミは袴の裾を綺麗に捌いて腰を下ろした。

遺体が並べられた空間に、ぽつりと静けさが満ちる。

「ヨミ、説明してくれるんだよな」

「ええ、はいはい勿論ですよ。ですがちよつと前置きを置かせてくださいね。ハヤくん、私の名前で何かおかしいって思ったことはありませんか?」

「は?あんたの名前はヨミだろ」

「ええ。ヨミです。名字は捨てたので無くて、私はただのヨミなのですよ。そうしてさらに、私の故郷ではヨミの名前の響きにはこういう意味があります。ヨミは、黄泉。死後の世界を意味する単語なのです」

「……じゃ、あんたは『あの世』みたいな意味の名前をつけられたってことか?」

子どもにつける名としては、あまり未来への希望に満ち溢れている感じがしない。

本来は、国が違うなら風習も違って当たり前だ。けれど、俺の知る限りヨミという響きにあの世という意味はない。

南大陸では、魔族との大戦の影響で言語がほぼ統一されて久しい。

かつてあったという、国や地域独自の言語は絶滅に近いのだ。

戦場で味方同士が違う言葉を話して混乱してはならないと決められた影響で、人類は統一言語の習得に舵を切って、多言語の世界はなくなつた。長く長く続いた戦争の影響で見捨てるしかなかったもの、破壊するしかなかったものは多くあるが言語はまさにその一つ。

なのに、ヨミの故郷では違う言語を使っていたらしい。なくもない話だが、珍しくはあつた。

というか俺の故郷の里も、基本的には統一言語での会話をしていたが北大陸にいた頃の先祖の言葉も残っていたのだ。

歌や地名や人名に微かな名残りがあただけで、日常会話で流暢に話せる者はいなくなっていたし、俺もまったくわからないも同然だけだ。

「ええ、まあそうですね。ぶつちやけ『死神ちゃん』みたいなノリの名前なんですよ。そしてもってこの名前には意味がありましてね。私のような白髪と黒い瞳を持ち、死者と会話できる能力を持った異能者に与えられた名なのです。一代に一人しか生まれな、専用名なんですけどねコレが」

「……死者、と、話す、だと?」

「ええ。がつつり死んでる人と、です」

咄嗟に何も言えないこちらを前に、ヨミは指を二本立てた。

「私の故郷はですね。北大陸からの避難民の末裔が作ったんです。この死者との対話能力は、北大陸にいた頃から血脈を通じて伝わっているものだそうです。カミからの授かりものって言われてましたが、実際どうなのでしょうね? 私見としてはただの特殊な魔力持ちって気がします」

「ちよつと待て。お前も北の民の末裔なのか?」

「ええ。君とホノメさんもでしょ? だってこの薙刀も私の服装も、私の故郷にあるものですから。薙刀を使えると言った君は、私の故郷と繋がりがあつておかしくないって思いましたよ。君たちの名前の響きだつてルグナくと違って私の故郷のと似てますし。ハヤくんこそ、私が元同郷人と考えなかつたんですか?」

「……考えなくもなかったが、重要とは思えなかったんだよ。今の俺に故郷は関係ねえ」

「あはは。そりやそうです。私も、君が親戚って気はしませんもんで、話を進めますと私は自分だけが使えるちよつと特殊な魔力で、死者の念を読み取れるんです」

絵具で描いたばかりのまだ乾いていない絵に紙を押し当てると、ぼんやりと絵の形が紙に写し取られるでしょう、とヨミは続けた。

あんな感じだと言われても少々ピンとは来ない。

「すぐには信じられないと思いますけど、私からはできるからできるって言うしかありません。どうします、ハヤくん？」

探るようなヨミに、こちらは肩をすくめて応じた。

尤も、拳は爪が肉に食い込むほど握り締めていたのだけれど。

死者は応えない。死者とは二度と出会えない。

それがこの世界の原則で、俺もずっとそれを信じて生きていた。

死んだ者は二度と取り戻せないから、だから、絶対に間違えてはいけない時があるのだと師匠は俺たちに繰り返し教えてくれた。

自分は昔間違えて、大切な人間を失ったからお前たちには誤りを犯してほしくないと。

目の前の女は、俺にとってのこの世の真理を覆すことを言っていたのである。

それも軽薄に、飄々と、何でもないゴミを潰すときみたいな。

だけれど、俺にはヨミの言を嘘だと否定もできない。

頭ごなしに他人を否定してはいけない、己の常識を常に疑って最善を選べということもまた、師匠から教わったことだったから。

「あんたが俺たちに嘘を吐く理由がわからねえからな。とりあえず信じとく。要は、死んだ衛兵たちに自分を殺したのは誰か聞いてくれたんだな？ 答えてくれたのかよ」

「……」

「おい、どうなんだ？」

「いえ、何かすんなり信じてくれるのが予想外で。君まあまあ疑り深そうなのに……あ、いや君が疑り深いのは姉弟子さんと師匠の身の安

全確保のためっぽいですね。それ以外、特に自分に関しては結構ガバガバしてるでしょ」

「勝手に俺を測るな。信じるのやめるぞ。何か見たんなら、とつとと情報寄越せつての」

どうやって死んだのかを、死者本人の口から本当に聞けるのかと疑問はある。

そんな術は聞いたことがないし、死者との対話など夢物語だという気がする。

けれど、先ほどの蛍火色の光が異常で異質なナニ力であつたのも事実だ。

感じたことのない気配と魔力の質に、理解できないけれど肌が粟立つヨミの唄。

あのとき、死者の魂や心、或いは思念の欠片を前にしていたと見なすなら、完全な納得はできないまでもすんと心に落ちてくる何かがあつたのだ。

「んもー、せつかちですね。とはいえ時間がもつたいないのも事実。わかつたことだけすぱつと伝えましょうか」

「そうだよ。早くしてくれ、頼むから」

「では結論を述べましょう。……衛兵の彼らは殺されています。それも、魔族と人間の両方によつて。さらに正確に言えば、魔族を操つた人間の手で殺されたみたいですよ」

「これって相当に危機的状況じゃありませんか、と軽口のように言い立てるヨミの唇が、俺には異様に赤く見えたのだった。」